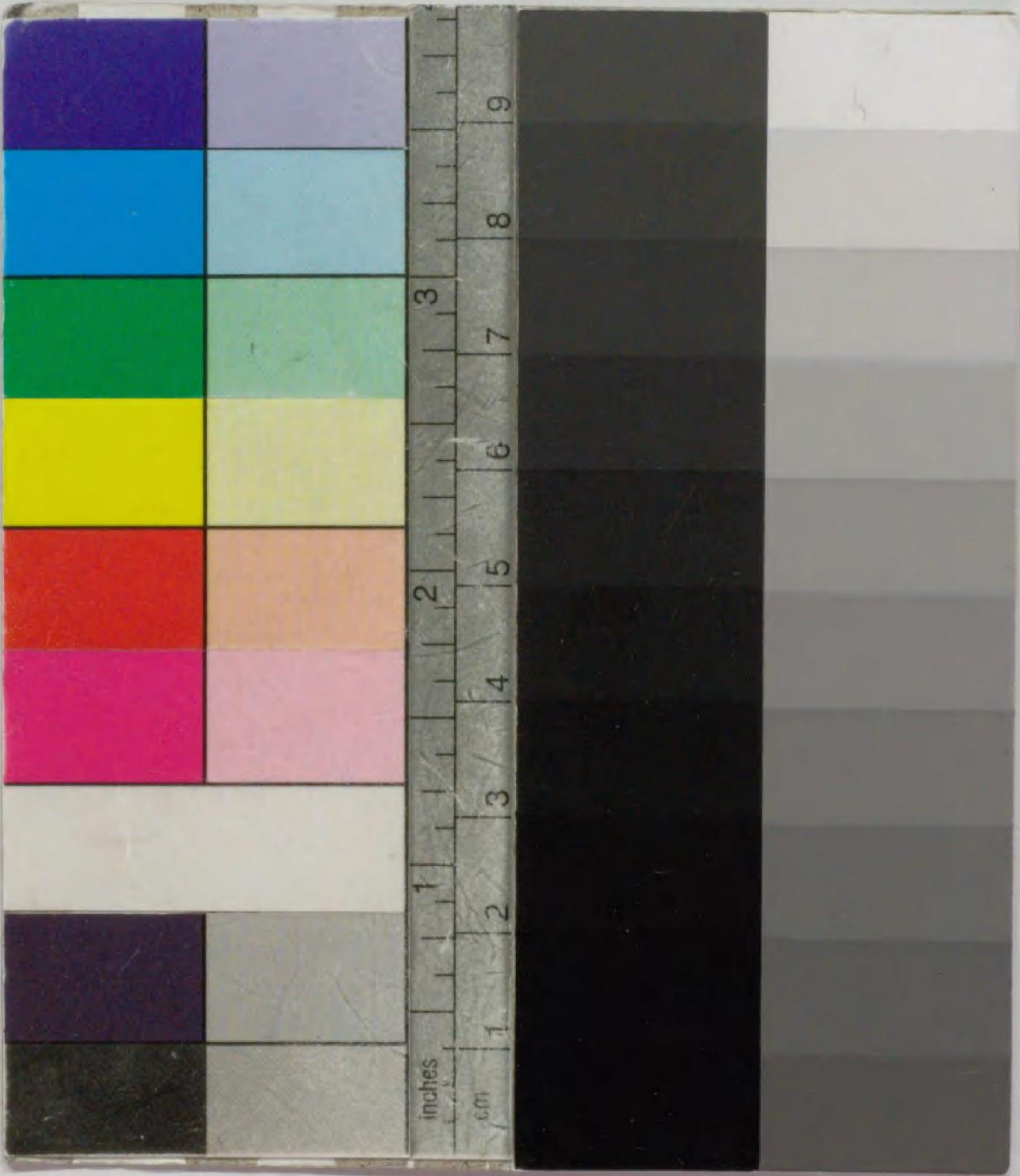


550  
156

550-156  
1200501508194

口  
複  
写





3. 3. 10



群

豚

著 治傳島黑



書叢人新壇文

8

版堂陽春



# 豚群

著治傳島黑

文壇  
新人  
叢書

8



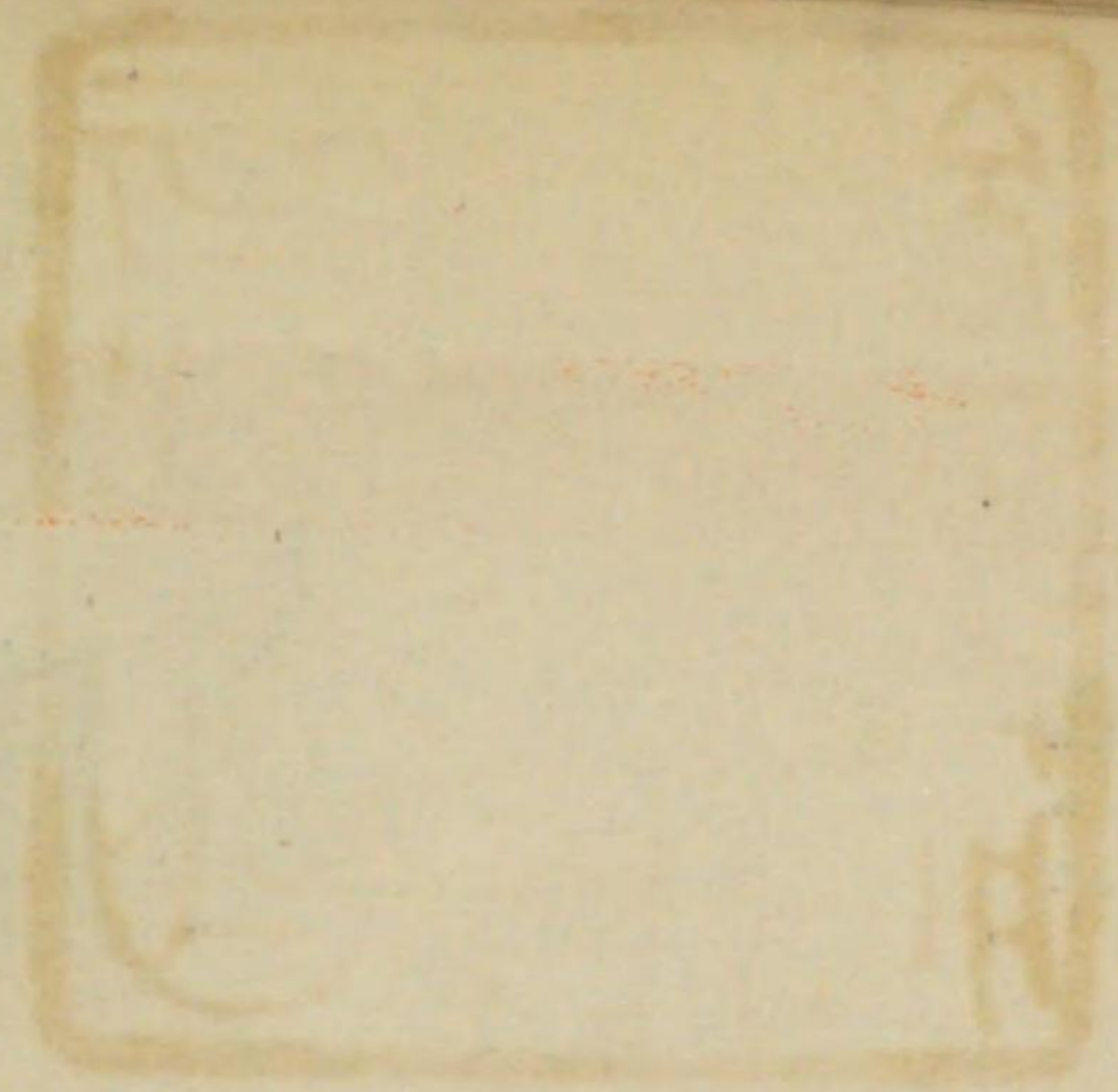
春陽堂版



550-156

次 目

豚	群	一
電	報	二三
二	錢	四三
雪	の	五五
シ	ベ	
リ	ア	
村	の	八三
網	元	
脚	を	一一七
折	ら	
れ	た	
男		
俎	板	一四一
と	播	
古	木	
本	を	一五一
た	づ	
ね	て	





豚

群



牝豚は、紅く爛れた腹を汚れた床板の上に引きずりながら息苦しさをのろく歩いてゐた。暫らく歩き、餌を食ふとさも疲れたやうに、麥藁を短く切つた敷藁の上に行つて横たはつた。腹はぶつてりふくれてゐる。時々、その中で仔が動いてゐるのが外から分る。だいで澤山仔を持つてゐさうだ。健二はちつと柵にもたれてそれを見ながら、かういふやつを野に追ひ放つても大丈夫かな、とそんなことを考へてゐた。溝にでも落ると石崖の角で腹が破れるだらう。さういふことになると、家の方で困るんだが……。

問題が解決するまで、これからなほ一年かゝるか二年かゝるか分らないが、それまでもかく豚で生計を立てねばならなかつた。豚と云つても馬鹿にはならない。三十貫の豚が一匹あればツブシに賣つて、一家が一ヶ月食つて行く糧が出るのだ。こゝ半年ばかり、健二は、親爺と二人で豚飼ひばかりに専心してゐた。荷車で餌

を買ひに行つたり、小屋の掃除をしたり、交尾期が来ると、掛け合はして仔豚を作ることを考へたり、毎日、そんなことで日を暮した。おかげで彼の身體にまで豚の臭ひがしみこんだ。風呂でいくらよく洗つても、その變な臭氣は皮膚から抜けきらなかつた。

もとは、小屋も小さく、頭數も少なくなつて、母が一人で世話をしてゐたものだつた。親爺は主に畠へ行つてゐた。健二は、三里ほど向うの醬油屋街へ働きに出てゐた。だが、小作料のことから、田畑は昨秋、收穫をしたきり耕されず、雜草が蔓るまゝに放任されてゐた。谷間には、稻の切株が黒くなつて、そのまゝ残つてゐた。部落一帯の田畑は殆んど耕されてゐなかつた。小作人は、皆な豚飼ひに早替りをしてゐた。

たゞ、小作地以外に、自分の田畑を持つてゐる者だけが、そこへ麥を蒔いてゐた。それが今では、三尺ばかりに伸びて穂をはらんでゐる。谷間から丘にかけて一帯に耕地が固くなつて荒れるがまゝにされてゐる中に、その一隅の麥畑は青々と自分の



出来ばえを誇つてゐるやうだつた。

二

もう今日か明日のうちに腹から仔豚が出て来るかも知れんのだが、さういふやつを野ツ原へ追ひ放つても大丈夫だらうかな、無慘に豚を殺すことになりはしないか。腹が重く、動作がのろいんだが、健二はやはりこんなことを氣遣つた。

しかし、それはそれとして、今度の計畫はうまく行くかな、やりしくぢると困るんだ。……

そこへ親爺が残飯桶を荷つて丘の道を登つて來た。

「宇平ドンにや、今、宇一がその小屋へ來とるが、よその豚と間違ふせに放すまゝ、云ひよるが……。」と、親爺は云つた。

健二は老いて皺びた父の方を見た。残飯桶が重さうだつた。

「宇一は、だいぶ方々へ放さんやうに云ふてまわりよるらしい。」親爺は、桶を置いて一と息してまた云つた。

5

「えゝ!?……裏切つてやがるな、あいつ!」健二は思はず舌打ちをした。

「放したところで、取られるものはどうせ取られるやら知れんのぢや。」親爺は、宇一にさほど反感を持つてゐないらしかつた。寧ろ、彼も放さない方がいゝ、とも思つてゐるやうだつた。

「あいつの云ふことを聞く者がだいぶ有りさうかな?」

「さあ、それや、中にや有るわい。やつぱりえゝ豚がよその瘦せこつと變つたりすると自分が損ぢやせに。」

「そんな、しかし一寸した慾にとらはれちや仕様がな。……それぢや、初めつから爭議などやらなけやえゝ。」健二はひとりでに憤慨する口吻になつた。

親爺は、間を置いて、

「われ、その仔はらみも放すつもりか?」と、眼をしよほくさし乍らきいた。

「うむ、」



「池か溝へ落ちこんだら、折角これだけにしたのに、親も仔も殺してしまふが……。」  
「そんなこと、それや我慢するんぢや。」健二は親爺にばかりでなく、自分にも云ひ聞かせるやうにさう云つた。

親爺は嘆息した。

柵をはづして、二人が糞に汚れた敷藁を出して新らしいのに換へてゐると、にや／＼しながらいつも他人の顔いろばかりを伺つてゐる宇一がやつて來た。

豚が新らしい敷藁を心地よがつて、床板を蹴つてはねまわつた。

「お主ンここにやちやんと放す用意が出來とるか？」と健二は相手を見た。

「あゝ。」宇一はあいまいな返事だつた。

「いざといふ場合に柵がはづれなんだりすると大變だぜ。俺等ちやんと用意しとるんだ。」健二はわざと大仰に云つた。それで相手の反應を見て、どういふつもりか推し測らうとする考へだつた。

6  
宇一は、顔に、直接、健二の視線を浴びるのをさけた。暫らくして彼は變に陰氣

7  
な眼つきで健二の顔をうかゞひながら、

「お上に手むかひしちや、却つてこつちの爲になるまいことい。」と、半ば呟くやうに云つた。

地主は、小作料の代りに、今、相場が高くつて、百姓の生活を支へる唯一の手だてになつてゐる豚を差押へやうとしてゐた。それに對して、百姓達は押へに來た際、豚を柵から出して野に放たう、さうして持主を分らなくしよう。かう會合できめたのであつた。會の時には、一人の反對者もなかつた。それがあとになつて、自分の利益や、地主との個人的關係などから寢返りを打たうとする者が二三出て來たのであつた。

豚  
宇一の家には、麥が穂をはらんで伸びてゐる自分の田畑があつた。また、よく肥大した種のいゝ豚を二十頭ばかり持つてゐた。豚を放てば自分の畠を荒される患へがあつた。いゝ豚がよその悪い種と換るのも惜しい。それに彼は、いくらか小金を溜めて、一割五分の利子で村の誰れ彼れに貸付けたりしてゐた。つひすると、小作



料を差押へるにもそれが無いかも知れない小作人とは、彼は類を異にしてゐた。けれども、一家が揃つて慾ばりで、宇一はなほ金を溜るために健二など、一緒に去年まで町へ醬油屋稼ぎに行つてゐた。

村の小作人達は、百姓だけでは生計が立たなかつた。で、田畑は年寄りや、女達を作ることにして、若い者は、たいてい町へ稼ぎに出てゐた。健二もその一人だつたのである。彼は三年ほど前から町へ働きに出、家では、親爺や妹が彼の持つて歸る金をあてにして待つてゐた。

醬油屋は村の田畑始んどすべての地主でもあつた。そして、町では、彼の傭主だつた。

昨年、暮れのことである。

火を入れた二番口の醬油を溜桶に汲んで大桶へかついでゐると、事務所から給仕が健二を呼びに來た。腕にかゝつた醬油を前掛でこすり／＼事務所へ行くと、杜氏が、都合で主人から暇が出た、——突然、さういふことを彼に告げた。何か些細が

ありさうだつた。

「どうしたんですか?」

「君の家の方へ歸つて見ればすぐ分るさうだが……。」杜氏は人のいゝ笑ひを浮べて、「親方は別に説明してやることはいらんと怒りよつたが、なんでも、地子のことでごた／＼しとるらしいぜ。」

「どういふ具合になつとるんです?」

健二は顔を前に突き出した。——今年是不作だつたので地子を負けて貰はう。取り入れがすんですぐ、その話があつたのは彼も知つてゐた。それから、かなりごた／＼してゐた。が、話だどうきまつたか、彼はまだ知らなかつた。

杜氏は、話す調子だけは割合おだやかだつた。彼は、

「お主の賃銀もその話が片づいてから渡すものは渡すさうぢや、まあ、それまでざいへ去んで休んどつて貰へやえ。」と云つた。

「そいつは併し困るんだがなあ。賃銀だけは貰つて行かなくちや!」



既に月の二十五日だった。暮れの節季には金がいるから十二月は日を詰めて働いたのであつた。それに、前月分も半分は向うの都合でよこしてゐなかつた。今、一文も渡さずに放り出すのは、あまりに悪辣である。健二は暫らく杜氏と押問答をしたが、結局杜氏の云ふがまゝになつて、男部屋へ引き下つた。そこでふだん着や、襦袢や足袋など散らかつてゐるものを集めて、信玄袋に入れ、歸る仕度をした。

「おや、君も暇が出たんか？」宇一が手を拭き乍ら這入つて來た。

「うむ。……君もか？」

「……やちもないことになつた。賃銀も呉れやせんぢやないか。……誰れが爭議なんどやらかしたんかな。」彼は、既にその時から、傭主を憎むよりは、むしろ爭議をやつた仲間を恨んでゐた。

「こんなずるい手段で來ると知つとりや、前から用意をしとくんぢやつたのに……」

「健二は自分の迂濶さを口惜しがつた。

同じ村から來てゐる二三の連中が、暫らくして、狐につまゝれたやうな、間の抜

けた顔をして這入つて來た。

「おい、お主等、このまゝおとなしく引き上げるつもりかい！ 馬鹿々々しい！」

村に妻と子供とを置いてある留吉が云つた。「皆な揃ふて大將のそこへ押しかけてやらうぜ。こんな不意打を喰はせるなんて、どこにあるもんか！」

彼等は、腹癒せに戸棚に下駄を投げつけたり、障子の棧を武骨な手でへし折つたりした。この秋から、始めて、十六で働きにやつて來た、京吉といふ若者は、部屋の隅で、目をこすつて、鼻をすゝり上げてゐた。彼の母親は寡婦で、唯一人、村で息子を待つてゐるのであつた。

「誰れが爭議なんかおつぱじめやがつたんかな。どうせ取られる地子は取られるんだ。」宇一は、勝手にぶつ／＼こぼした。「こんなことをしちや却つて、皆がひまをつぶして損だ。ちつとおとなしくしとれやえゝんだ。」

彼は儲けた金を家へすぐ送る必要がなかつたので、醬油屋へそのまゝ、利子を取つて貸したりしてゐた。悪くするとそれをかへして貰へない。宇一は、そんなこと



に氣をまわしてゐるのであつた。

それを知つてゐる健二はなほむか／＼した。

「おい、お主等どうだい？」

ふと煤煙にすゝけた格子窓のさきから、聞覚えのある聲がした。

「おや、君等もやられたんか！」窓際にゐた留吉は、障子の破れからのぞいて、びつくりして叫んだ。

そこには、他の醬油屋で働いてゐた同村の連中が、やはり信玄袋をかついで六七人立つてゐた。彼等も同様に、貨銀を貰はずに、追ひ出されたのであつた。

三

12

ある朝、町からの往還をすぐ眼下に見おろす郷社の杜へ見張りに忍びこんでゐた二人の若者が、息を切らし乍ら馳せ歸つて來た。

「やつて來るぞ！ 氣をつけろ！」

13

暫らくたつと、三人の洋服を着た執達吏が何か話し合ひながら、村へ這入つて來た。彼等は豚小屋に封印をつけて、豚を柵から出して、百姓が勝手に賣買することを許さなくするためにやつて來たのである。

百姓達は、それに對して若者が知らして歸ると共に、一勢に豚を小屋から野に放つことに申合せてゐた。

健二は、慌て、柵を外づして、十頭ばかりを小屋の外へ追ひ出した。中には、外に出るのを恐れて、柵の隅にうづくまつてゐるやつがあつた。さういふやつには、彼は一と鞭を呉れてやつた。すると、鈍感なセメント樽のやうな動物は割れるやうな呻きを發して、そこらにある水桶を倒して馳せ出た。腹の大きい牝豚は仲間の呻きに鼻を動めかしながら起き上つて、出口までやつて來た。柵を開けてやると、彼女は大きな腹を地上に引きずりながら低く呻いてのろ／＼外へ出た。

裏の崖の上から丘の谷間の様子を見てゐた留吉が、

「おい、皆目、追ひ出す者はないが、……宇一の奴、ほんとに裏切りやがつたぞ！」

豚

群



と、小屋の中の健二に叫びかけた。

「まだ二十匹も出てゐないが……。」

「ええ！」健二は自分の豚を出すのを急いだ。

「佐平にも、源六にも、勘兵衛にも出さんが、おい出て見ろ！」留吉はつゞけて形勢が悪いことを知らせた。「これぢや駄目だ！」

少くともかういふことは、皆が一勢にやらなければ成功すべきものではない。少数ではやつた者がひどいめにあふばかりだ。それだのに村の半数は出してゐないらしい。

健二は急いで小屋の外へ出て見た。丘から谷間にかけて、四五匹の豚が、急に廣々とした野良へ出たのを喜んで、土や、雑草を蹴つて跳ねまわつてゐるばかりだ。「これぢやいかん！」

14 「宇一め、裏切りやつたんだ！」留吉は齒切りをした。「畜生！仕様のない奴だ。」今、ぐづ／＼してゐる譯には行かなかつた。執達吏は、もう取つ着きの小屋へ這

15 入りかけてゐた。健二と留吉とは無中になつて、丘の細道を家ごみの方へ馳せ降りて行つた。

三人の執達吏のうち、一人は、瘦せて歩くのも苦しさうな爺さんだつた。他の二人はきれいな髭を生じた、疳癩で、威張りたがるやうな男だつた。

彼等が最初に這入つた小屋には、豚は柵の中に入つたまゝだつた。彼等は一寸話を中止して、豚小屋の悪臭に鼻をそむけた。

それまで、汚れた床板の上に寝ころんで物憂さうにしてゐた豚が、彼等の靴音にびつくりして急に跳ね上つた。そして荒々しく床板を蹴りながら柵のところへやつて来た。

豚 豚の鼻さきが一寸あたると柵はがた／＼くずれるやうに倒れてしまつた。すると豚は柵の倒れた音で二重に驚いて、なほひどくとび上つた。さうして、その拍子にとび／＼しながら柵から外へ出た。三人の、大切な洋服を着た男は、糞に汚れた豚に僻易して二三歩あとすざりした。豚は彼等が通らせて呉れるのをいゝことにして



外へ出てしまつた。

一匹が跳ね、騒ぎだしたのにつれて、小屋中の豚が悉く、それぞれ呻き騒ぎだした。さうして、柵を突き倒しては、役人の間を走りぬけて外へ出た。きれいな鬃の男は、やつと、この豚どもを逃がしてはならないことに氣づいて、あとから白い手を振り上げて追つかけた。追つかけられると、豚はなほ向うへ馳せ逃げた。

「チエツ！ 仕様がな。洋服の男は、これは百姓に入れさせればいゝつもりで、苦々しい笑を浮べ乍ら次の小屋へやつて行つた。

二軒目の小屋には一頭もゐず、がらあきだつた。彼等は何氣なく三軒目へ這入つた。そこにも、十個ばかりの柵が、がらあきでたゞ仔豚をかゝへた牝が一匹横たはつてゐるばかりだつた。そこで、二十分ばかりかゝつて、始めての封印をして、彼等は外に出た。ところが、その時には、丘にも谷間にも豚群が呻き騒いで、剛い鼻さきで土を掘りかへしたり、無鐵砲に馳せまわつたりしてゐた。豚は一見無神経で、すぐにも池か溝かに落ち込みさうだつた。しかし、無中に馳せまわつてゐながら、

崖端に近づくと、一步か二歩のところ、安全な方へ引つかへした。

三人は、思はず驚きの眼を見はつて、野の豚群を眺め入つた。

ところが、暫らくするうちに、二人の元氣な男は、怒りに頸すぢを赤くした。そして腕をぶる／＼振はせだした。豚が野に放たれて呻き騒いでゐる理由が分つたのであつた。

三十分程たつた頃、二人は、上衣を取り、ワイシャツ一つになつて、片手に棒を握つて、豚群の中へ馳こんでゐた。二人は棒を振つて、頻りに何か叱咤した。尻を殴られた豚は悲鳴を上げ、野良を氣狂ひのやうに跳ねまわつた。

二人は、始めのうちは、豚を小屋に追ひかへさうと努めてゐるやうだつた。しかし豚は棒を持った男が近づいて來ると、それまでおとなしくしてゐたやつまでが、急に頭を無器用に振つてはねとびだした。二人はいつのまにか腹立て怒つて大切なズボンやワイシャツが汗と土で汚れるのも忘れて、無暗に豚をぶん殴りだした。



豚は呻き騒ぎながら、彼等が追ひかへさうと努めてゐるのとは反對に、小屋から遠い野良の方へ猛獸の行軍のやうになだれよつた。

と、向うの麥畑に近い方でも誰れかが棒を振つて、寄せて來る豚を追ひかへしてゐた。

「叱ツ、これや！ 麥を荒らしちやいかんが！」

それは、自分の畑を守つてゐる宇一だつた。

「叱ツ、これや、あつちへ行けい！」

どれもこれも自分の豚ではなかつたので彼は、力いっぱいに、やつて來るやつをぶん殴つた。豚は彼の猛打を浴びて、またそこからワイシャツの方へ引つかへした。裏切つた者があるにもかゝはらず、放たれた豚の数は夥たゞしいものだつた。暫らくするうちに、二人のワイシャツは、へとく〜に疲れ、棒を捨て、首をぐつたり垂れてしまつた。……

18 「そら、爺さんがやつて來たぜ。」

19 やつと丘の上へ引つかへして、雜草の間で一と息ついてゐた留吉が老執達吏を見つけた。

「どれ、どこに？」谷間ばかりを見下してゐた健二がきいた。

「そらその下だ。」留吉は小屋の脇を指した。

痩せて、骸骨のやうな、そして険しい目つきの爺さんが、山高をアミダにかむり、片手に竹の棒を握つて崖の下へやつて來た。

「おい、こらッ！」

大きな腹をなげ出して横たはつてゐる牝豚を見つけて、彼は棒でゴツ〜尻を突いた。

豚は「ウウ」と、唸つて起き上らうとしなかつた。

「おい、こら！」

「ウ、ウウ。」牝豚はやはり寝てゐた。

「おい、こら！」爺さんは、又、棒を動かした。



健二と留吉は草にかくれてくつく笑つた。

一日かゝつて、三人の役人は、結局、柵に固く栓をして、初めつから豚を出さなかつた、二三の小屋にのみ封印をして、疲れ切つて歸つて行つた。彼等は、それが自分達に降つた裏切者の小屋であるとは氣づく餘裕がなかつた。同様に手むかひをする百姓のだと思つて、故意に嚴重に處置をした。

#### 四

二週間ほどたつて、或る日、健二が残飯桶をかついで丘の坂路を登つてみると、彼の足音を聞きつけて、封印を付けられた宇一の小屋から二十匹ばかりが急に揃つて、割れるやうな呻きを發して、騒ぎだした。饑え渴して一時に餌を求めてゐる呻きだつた。

20 彼が桶を置いて小屋に這入つて見ると、裏切者の豚は、糞で眞黒に汚れ、痩せて、眼をうろ／＼させながら這つてゐた。

21 どうせ地主に取られることに思つて、宇一は餌もやらなければ、ろくに世話もしなかつたのである。

豚は、必死に前肢を柵にかけ、健二をめぐけて、とびつくやうにがつ／＼して何か食物を求めた。小屋のわめきは二三丁さきの村にまで溢れて行つて、人々の耳を打つた。……

それから一週間ほど、それ等の汚れた豚は晝夜わめきつゞけてゐたが、つひに、一ツ一ツぱた／＼斃れだした。

野に放たれ騒いだ豚は、今、柵の中でおとなしく餌を食つてゐる。

主謀者がその後どうなつたか？

いや、彼等は、役人に反抗したが、結局、どうにもせられなかつた。

彼等は、やつたゞけ、やり得だつたのである。





報





源作の息子が市の中學校の入學試験を受けに行つてゐるといふ噂が、村中にひろまつた。源作は、村の貧しい、等級割一戸前も持つてゐない自作農だつた。地主や、醬油屋の坊つちやん達なら、東京の大學へ入つても、當然で、何も珍らしいことはない。で、噂の種にもならないのだが、ドン百姓の源作が、息子を、市の學校へやると云ふことが、村の人々の好奇心をそよつた。

源作の鼻の、おきのは、隣家へ風呂を貰ひに行つたり、念佛に參つたりすると、「お前とこの、子供は、まあ、中學校へやるんぢやないかいな。錢が仰山あるせになんほでも入れたらえいわいな。ひゅゅ。」と、他の内儀達に皮肉られた。

おきのは、自分から、子供を受験にやつたとは、一とも言も喋らなかつた。併し、

息子の出發した翌日、既に、道辻で出會つた村の人々はみなそれを知つてゐた。

最初、

「まあ、えら者にしやうと思ふて學校へやるんぢやあらう。」と、他人から云はれると、おきのは、肩身が廣いやうな氣がした。嬉しくも思つた。

「あんた、あれが行たんを他人に云ふたん？」と、彼女は、晝飯の時に、源作に訊ねた。

「いゝや。俺は何も云ひやせんぜ。」と源作はむし／＼した調子で答へた。

「さう。……けど、早や皆な知つて了ふとら。」

「ふむ。」と、源作は考へこんだ。

源作は、十六才で父親に死なれ、それ以後一本立ちで働きこみ、四段歩ばかりの畠と、二千圓ほどの金を作り出してゐた。彼は、五十才になつてゐた。若い時分には、二三萬の金をためる意氣込みで、喰ひ物も、ろくに食はずに働き通した。併し、彼は最善を盡して、やう／＼二千圓たまつたが、それ以上はどうしても積りさ



うになかつた。そしてもう彼は人生の下り坂をよほどすぎて、精力も衰へ働けなくなつて來たのを自ら感じてゐた。十六からこちらへの經驗によると、彼が困難な労働をして僅かづゝ金を積んで來てゐるのに、醬油屋や地主は、別に骨の折れる仕事もせず、澤山の金を儲けて立派な暮しを立ててゐた。また彼と同年だつた、地主の三男は、別に學問の出来る男ではなかつたが、金のお蔭で學校へ行つて今では、金比羅さんの神主になり、うま／＼と他人から金をまき上げてゐる。彼と同年輩、または、彼より若い年頃の者で、學校へ行つてゐた時分には、彼よりよほど出來が惡るかつた者が、少しよけい勉強をして、讀み書きが達者になつた爲めに、今では、醬油會社の支配人になり、醬油屋の番頭になり、または小學校の校長になつて、村でえらばつてゐる。そして、彼は、さういふ人々に對して、頭を下げねばならなかつた。彼はさういふ人々の支配を受けねばならなかつた。さういふ人々が村會議員になり勝手に戸數割をきめてゐるのだ。

百姓達は、今では、一年中働きながら、饑えなければならぬやうになつた。畠

の收穫物の賣上げは安く、税金や、生活費はかさばつて、差引き、切れこむばかりだつた。さうかといつて、醬油屋の労働者になつても、仕事がえらくて、賃銀は少なかつた。が今更、百姓をやめて商賣人に早變りをする事も出來なければ、醬油屋の番頭になる譯にも行かない。しかし息子を、自分がたどつて來たやうな不利な立場に陥れるのは、彼れには忍びないことだつた。

二人の子供の中で、姉は、去年隣村へ嫁づけた。あとには弟が一人残つてゐるだけだ。幸ひ、中學へやるくらへの金はあるから、市で傘屋をしてゐる従弟に世話をして貰つて、安くて通學させるつもりだつた。

「具合よく通つてくれりやえいがなあ。」と彼は茶碗を置いて云つた。

「そりや、通るわ一年からずつと一番ばかりでぬけて來たんぢやもの。」と、おきのは源作の横廣い頭を見て云つた。胡麻鹽の頭髮は一ヶ月以上も手入れをしないので長く伸び亂れてゐた。

「いゝや、それでも市に行きやえらい者が多いせにどうなるやら分らんで。」



「毎朝、私、観音様にお願を掛けよるんぢやものきつと通るわ。」  
源作は、それには答へなかつた。彼は、息子が中學を卒業して、高等工業へ入つて、出ると、工業試験場の技師になり、百二十圓の月給を取るのを想像してゐた。

三

市の従弟から葉書が來た。息子は丈夫で元氣が好いと書いてあつた。縣立中學は、志願者が非常に多いと云つて來た。市内の小學校を出た子供は、先生が六ヶ月も前から、肝煎つて受験準備を整へてゐる上に、試験場でもあはてずに落ちついて居るだけを書いて出すが、田舎から出て來た者は、さういふ點で二三割損をする。もつとも、この子はよく出來るといふことだから、通ることは通るだらうが、と書いてあつた。

28 「通つたらえらいものぢやがなあ。」源作は、葉書を鼻に讀んできかせた後、かう云つた。

29 「もつと熱心にお願をするわ。」

かういふことを、神佛に願つても、効くものでない、と常々から思つてゐる源作も、今は、妻の言葉を退ける氣になれなかつた。

源作が野良仕事に出てゐる留守に、おきの叔父が來た。

「そちな、子供を中學校へやつたと云ふぢやないかいや。一體、何にする積りどいや」と叔父は、磨りちびてつる／＼した椽側に腰を下して、おきのに訊ねた。

「あれを今、學校をやめさして、働きに出しても、そんなに錢は取れず、さうすりや、あれの代になつても、また一生頭が上がらずに、貧乏たれで暮さにやならんせに、今、ちいと物入れて學校へでもやつといてやつたら、また何ぞにならうと思ふていない。」と、おきのは答へた。

「ふむ。そりや、まあえいが、中學校を上つたつて、えらい者になれやせんぜ。」

「うちの源さん、まだ上へやる云ひよらあ。」

「ふむ。」と、叔父は、暫らく頭を傾けてゐた。



「庄屋の旦那が、貧乏人が子供を市の學校へやるんをどえらい嫌ふとるんぢやせにやつても内所にしとかにやならんぜ。」と、彼は、聲を低めて、しかも力を入れて云つた。

「さうかいな。」

「誰れぞに問はれたら、市へ奉公にやつたと云ふとくがえいぜ。」

「はあ。」

「ようく、氣をつけにやならんぜ……」と叔父は念をおした。そして、立つて豚小屋を見に行つた。

「この牡はすか／＼肥えるぢやないかいや。」

親豚は、一ヶ日程前に賣つて、仔豚のつがひだけ飼つてゐる。その牡の方を指して叔父はさう云つた。

「はあ。」と、おきのは云つて、彼女も豚小屋の方へ行つた。

「豚を十匹ほど飼ふたら、子供の學資くらゐ取られんこともないんぢやがな、……」

何にせ、ここぢや、貧乏人は上の學校へやれんことにしとるせに、奉公にやつたと云ふとかにやいかんて。」と、叔父は繰り返した。

おきのは、叔父の注意に従つて、息子のことを訊ねられると、傘屋へ奉公に出したと云つた。併し、村の人々は、彼女の言葉を本當にしなかつた。でも、頑固に、「いいえいな、家に、市の學校へやつたりするかいしようがあるもんかいな。食ふや食はずぢやのに、奉公に出したんにきまつとら。」と、彼女は云ひ張つた。

が、人々は却つて皮肉に、

「お前んとここにや、なんほかこれが（と拇指と示指とで圓るものをこしらへて、）あるやら分らんのに、何で、一人息子を奉公やかいに出したりすらあ！ 學校へやつたんぢやが、うまいこと嘘をつかあ、……まあ、お前んとこの子供はえらいせに、旦那さんにもなるわいの、ひひひ……」

おきのは、出會した人々から、嫌味を浴せかけられるのがつらさに、

「もういつそ、やめさして、奉公にでも出すかいの。」と源作に云つたりした。



「奉公やかい。」と、源作は、一寸冷笑を浮べて、むしくした調子で、「已等一代はもうすんだやうなもんぢやが、あれは、まだこれからぢや。少々の錢を残してやるよりや、教育をつけてやつとく方が、どんだけ爲めになるやら分らせん。村の奴等が、どう云はうがかまふたこつちやない。庄屋の旦那に錢を出して貰ふんぢやなし、俺が、錢を出して、俺の子供を學校へやるのに、誰に氣兼ねることがいるかい。」おきのは、叔父の話をきいたり、村の人々の皮肉をきいたりすると、息子を學校へやるのが良くないやうな氣がするのだつたが、源作の云ふことをきくと、源作に十二分の理由があつて、簡單、明瞭で、他から文句を云ふ餘地はないやうに思はれた。

#### 四

32 試験がすんで、歸るべき筈の日に、おきのは、停車場へ迎へに行つた。彼女は、それぞれ試験がすんで歸つてくる坊つちやん達を迎へに行つてゐる庄屋の下婢や、

33 醬油屋の奥さんや、呉服屋の若旦那の眼につかぬやうに、停車場の外に立つて息子を待つてゐた。彼女は、自分の家の地位が低いために、さういふ金持の間に伍することが出来ないやうに、自から、卑下してゐた。そして、また、實際に、穢いド

ン百姓の鼻と見下けられてゐた。やがて、汽車が着くと、庄屋や、醬油屋や、呉服屋などの坊つちやん達が降りて來た。

「お母あさん。」と、醬油屋の坊つちやんは、プラットホームに降ると、すぐ母を見つけて、かう叫びながら、奥さんのゐる方へ走りよつた。片隅からそれを見てゐたおきのは、息子から、かうなれなれしく、呼びかけられたら、どんなに嬉しいだらうと思つた。

「坊つちやんお歸り。」と庄屋の下婢は、いつもぼかんと口を開けてゐる、少し馬鹿な庄屋の息子に、丁寧にお辭儀をして、信玄袋を受け取つた。

おきのは、改札口を出て來る下車客を、一人一人注意して見たが、彼女の息子は



ゐなかつた。確かに、今、下車した坊つちやん達と一緒に、試験がすんで歸つて來る筈だつた。村をたつて行つた日は異つてゐたが、學校は同じだつた。彼女は、乗り越したのではあるまいかと心配しながら、なほ立つて、停車場の構内をじろく見廻した。

「僕、算術が二題出來なんだ。國語は満點ぢや。」醬油屋の坊つちやんは、あどけない聲で奥さんにこんなことを云ひながら、村へ通じてゐる縣道を一番先に歩いた。それにつづいて、下車客はそれぞれ自分の家へ歸りかけた。

「谷元は、皆な出來た云ひよつた。……」かういふ坊つちやんの聲も聞えた。谷元といふのは源作の姓である。

おきのは、走りよつて、息子のことを、訊ねてみたかつたが、醬油屋へ、良人の源作が勞働に行つてゐたのを思ひ出して、なほ卑下して、思ひ止まつた。

停車場には、驛員の外、誰れもゐなくなつた。おきのは、悄々と、歸りかけた。

84 彼女は、一番あとから、ほつ／＼行つてゐる呉服屋の坊つちやんに、息子のことを

35 訊ねやうと考へた。坊つちやんは、兄の若旦那と、何事か——多分試験のことだらう——話しあつて笑つてゐた。あの話がすんだら、近づいて訊ねやう、とおきのは心で考へた。うつかして乗り越すやうなあれぢやないが、……彼女は一方でこんなことも思つた。

若旦那の方に向いて、しきりに話してゐる坊つちやんの顔は、彼女は注意を怠らなかつた。そして、話が一寸中斷したのを見計らつて、急に近づいて、息子のことをきいた。

「谷元はまだ残つとると云よつた。」と、坊つちやんは、彼女に答へた。

「試験はもうすんだんでござんせうな。」

「はあ、僕等と一緒にすんだんぢやが、谷元はまだほかを受ける云ひよつた。」

「さうでござんすか。どうも有りがたうさん。」と、おきのは頭を下げた。彼女は若旦那に顔を見られるのが妙に苦るしかつた。

翌日の午後、従弟から葉書が來た。縣立中學に多分合格してゐるだらうが、若し



駄目だつたら、私立中學の入學試験を受けるために、成績が分るまで子供は歸らせずに、引きとめてゐる、といふことだつた。

「もう通らなんだら、私立を受けさしてまで中學へやらいでもえいわやの。家のやうな貧乏たれに市の學校へやつて、また上から目角に取られて等級でもあげられたら困らやの。」と、おきのは源作に云つた。

源作は黙つてゐた。彼も、私立中學へやるのだつたら、あまり氣がすすまなかつた。

## 五

36  
村役場から、税金の取り立てが來てゐたが、丁度二十八日が日曜日だつたので、二十九日に、源作は、銀行から預金を出して役場へ持つて行つた。もう昨日か、一昨日かに村の大部分が納めてしまつたらしく、他に誰れも行つてゐなかつた。収入役は、金高を讀み上げて、二人の書記に算盤をおかしてゐた。源作は、算盤が一と

37  
仕切すむまで待つてゐた。

「おい、源作！」

ふと、噎れた、太い、力のある聲がした。聞き覚えのある聲だつた。それは、助役の傍に來て腰掛けてゐる小川といふ村會議員が云つたのだつた。

「はあ、」と、源作は、小川に氣がつくと答へた。小川は、自分が村で押しが利く地位にゐるのを利用して、貧乏人や、自分の氣に食はぬ者を困らして喜んでゐる男であつた。源作は、頼母子講を取つた、抵當に、一段二畝の畠を書き込んで、其の監査を頼みに、小川のところへ行つた時、小川に、抵當が不十分だと云つて頑固にはねつけられたことがあつた。それ以來、彼は小川を恐れてゐた。

「源作、一寸、こつちへ來んか。」

源作は、呼ばれるまゝに、恐る／＼小川の方へ行つた。

「源作、お前は今度息子を中學へやつたと云ふな。」肥つた、眼に角のある、村會議員は太い聲で云つた。



「はあ、やつてみました。」

「わしは、お前に、たつてやんなとは云はんが、はたらき労働者が、息子を中學へやるんは良くないぞ。人間は中學やかいへ行ちや生意氣になるだけで、働かずに、理屈ばかりこねて、却つて村のために悪い。何んせ、働かずにぶら／＼して理屈をこねる人間が一番いかん。それに、お前、お前はまだこの村で一戸前も持つとらず、一人前の税金も納めとらんのだやぞ。子供を學校へやつて生意氣者にするよりや、税金を一人前納めるんが肝甚ぢや。その方が、國の爲めぢや。」と小川は、ゆつくり言葉を切つて、ぢろりと源作を見た。

源作は、びく／＼唇を顫はした。何か云はうとしたが、小川にかう云はれると、彼が前々から考へてゐた、自分の金で自分の子供を學校へやるのに、他に容喙されることはないといふ理由などは全く根據がないやうに思はれた。

「税金を持て來たんか。」

「はあ、さやうで……」

「それさうぢや。税金を期日までに納めんやうな者が、お前、息子を中學へやるのは以ての外ぢや。子供を中學やかいへやるのは國の務めも、村の務めもちやんと、一人前にすましてからやるものぢや。——まあ、そりや、お前の勝手ぢやが、兎に角今年から、お前に一戸前持たすせに、そのつもりで居れ。」

小川は、なほ、一時、いかつい眼つきで源作を見つめ、それから怒つてゐるやうにぶいと助役の方へ向き直つた。収入役や書記は、算盤をやめて源作の方を見てゐた。源作は感覺を失つたやうな氣がした。

彼は、税金を渡すと、すすろ役場から出て歸つた。

晝飯の時、

「今日は頭でも痛いんかいの。」と、おきのは彼の憂鬱に硬ばつてゐる顔色を見て訊ねた。彼は黙つて何とも答へなかつた。

飯がすんで、二人づれで畠へ行つてから、おきのは、

「家のやうな貧乏たれに、市の學校やかいへやるせに、村中大評判ぢや。始めつか



「やらなんだらよかつたのに。」と源作に云つた。

源作は何事か考へてゐた。

「もう縣立へ通らなんだら、私立へはやるまいな。早よ呼び戻したらえいわ。」  
「うむ。」

「分に過ぎるせに、通つとつても、やらん方がえいぢやけんど……。」とおきのは獨  
言つた。

暫らくして、

「そんなら、呼び戻さうか。」と源作は云つた。

「さうすりやえいわ。」おきのはすぐ同意した。

源作は畠仕事を途中でやめて、郵便局へ電報を打ちに行つた。

「チチビョーキスグカヘレ」

いきなりかう書いて出した。

歸りには、彼は、何か重荷を下したやうで胸がすつとした。

息子は、びつくりして十一時の夜汽車であはてゝ歸つて來た。

三日たつて、縣立中學に合格したといふ通知が來たが、入學させなかつた。

息子は、今、醬油屋の小僧にやられてゐる。

(一九二三、三月)



二錢銅貨



獨樂が流行つてゐる時分だつた。弟の藤二がどこからか健吉が使ひ古した古獨樂を探し出して來て、左右の掌の間に三寸釘の頭をひしやいで通した心棒を挟んでまわした。まだ、手に力がないので一生懸命にひねつても、獨樂は少しの間立つて廻ふのみで、すぐみそすつてしまふ。子供の時から健吉は凝り性だつた。獨樂に磨きをかけ、買った時には、細い針金のやうな心棒だつたのを三寸釘に挿しかへた。その方がよく廻つて勝負をすると強いのだ。もう十二三年も前に使つてゐたものだが、ひびきも入つてゐず、黒光りがして、重く、如何にも木質が堅さうだつた。油をしませたり、蠟を塗つたりしたものだ。今、店頭で賣つてゐるものとは木質からして異ふ。

しかし、重いだけ幼い藤二には廻し難かつた。彼は、小半日も上り框の板の上でひねつてゐたが、どうもうまく行かない。

「お母あ、獨樂の緒を買ふて。」藤二は母にせびつた。

「お父うにきいてみイ。買ふてもえいか。」

「えい云ふた。」

母は、何事にもこせ／＼する方だつた。一つは苦しい家計が原因してゐた。彼女は買つてやることになつても、なほ一應、物置きの中を探して、健吉の使ひ古しの緒が残つてゐないか確めた。

川添ひの小さい部落の子供達は、堂の前に集つた、それ／＼新しい獨樂に新しい緒を巻いて廻しては二ツをこちあてあつて勝負をした。それを子供達はコツツリコと云つた。緒を巻いて力を入れて放つて引くと、獨樂は澄んで廻りだす。二人が同時に廻して、代り代りに自分の獨樂を相手の獨樂にこちあてる。一方の獨樂が、みそをすつて消えてしまふまでつゞける。先に消にえた方が負けである。

「こんな黒い古い獨樂を持つとる者はウラ（自分の意）だけぢやがの。獨樂も新しいのを買ふておくれ！」藤二は母にねだつた。



「獨樂は一ツ有るのに買はいでもえいがな。」と母は云つた。

「ほいたつて、こんな黒いんやかい……皆なサラを持つとるのに！」

以前に、自分が使つてゐた獨樂がいいといふ自信がある健吉は、

「阿呆云へ、その獨樂の方がえいんちやがイ！」と、なぜだか弟に金を出して獨樂を買つてやるのが惜しいやうな氣がして云つた。

「うらむ。」

兄の云ふことは何事でも信用する藤二だつた。

「その方がえいんちや。勝負をしてみい。それに勝つ獨樂は誰れつちや持つとりやせんのちや。」

そこで獨樂の方は古いので納得した。しかし、母と二人で緒を買ひに行くと、藤二は、店頭の木箱の中に入つてゐる赤や青で彩つた新しい獨樂を慾しさうにいちくつた。

雜貨店の内儀に緒を見せて貰ひながら、母は、

「藤よ、そなんに店の物をいらひまわるな。手垢で汚れるがな。」と云つた。

「いゝえ、いらふたつて大事ござんせんぞな。」と内儀は愛相を云つた。

緒は幾十條も揃えて同じ長さに切つてあつた。その中に一條だけ他のよりは一尺ばかり短いのがあつた。スンを取つて切て行つて、最後に足りなくなつたものである。

「なんほぞな？」

「一本、十錢よな。その短い分なら八錢にしといてあげまさ。」

「八錢に……」

「へえ。」

「そんなら、この短いんでよろしいワ。」

そして母は、十錢渡して二錢銅貨を一ツ釣錢に貰つた。なんだか、二錢儲けたやうな氣がして嬉しかつた。

歸りがけに藤二を促すと、なほ、彼は箱の中の新しい獨樂をいちくつてゐた。他



から見ても、如何にも、慾しさうだつた。しかし無理に買つてくれともよく云はずに母のあとからついて歸つた。

二

隣部落の寺の廣場へ、田舎廻りの角力が來た。子供達は皆んな連れだつて見に行つた。藤二も行きかけたが。しかし、丁度稲刈りの最中だつた。のみならず、牛部屋では、鞍をかけられた牛が、粉ひき臼をまわして、くるくる、眞中の柱の周圍を廻つてゐた。その番もしなければならぬ。

「牛の番やかいどーナリヤ！」いつになく藤二はいやがつた。彼は納屋の軒の柱に獨樂の緒をかけ、両手に端を持つて引つぱつた。

「そんなら雀を追ひに來るか。」  
「いや。」

「そんなにキママを云ふてどうするんぞいや！ 粉はひかにやならず、稲にや雀が

たかりよるのに！」母は、けはしい聲をだした。

藤二は、柱と綱引きをするやうに身を反らして緒を引つぱつた。暫らくして、小さい聲で、

「皆な角力を見に行くのに！」と云つた。

「うちのやうな貧乏タレにや、そんなことはしとれやせんのだちや！」

「えい、い。」がつかりしたやうな聲で云つて、藤二はなほ緒を引つぱつた。

「そんなに引つぱつたら緒が切れるがな。」

「えい、い。皆のよれ短いんぢやもん！」

「引つぱつたつて延びせん——そんなことしよつたらうしろへころぶぞ！」

「えい、い延びるんぢや！」

そこへ父が歸つて來た。

「藤は、何ぐづぐ云よるんぞ！」藤二は睨みつけられた。

「そら見い、叱られろ。——さあ、牛の番をしよるんぢやぞ！」



母はそれをしほに、かう云ひおいて田へ出かけてしまった。  
父は、白の漏斗に小麦を入れ、おとなしい牛が、のそくく人の顔を見ながら廻つてゐるのを見届けてから出かけた。

藤二は、緒を買つて貰つてから、子供達の仲間に入つて獨樂を廻してゐるうちに、自分の緒が他人のより、大分短いのに氣づいた。彼は、それが氣になつた。一方の端を揃えて、較べると、彼の緒は誰のに比しても短い。彼は、まだ六ツだつた。他の大きい學校へ上つてゐる者とコツツリコをするといつも負けた。彼は緒が短いためになほ負けるやうな氣がした。そして、緒の兩端を持つて引つばるとそれが延びて、他人のと同じやうになるだらうと思つて、しりきに引つばつてゐるのだつた。彼は牛の番をしながら、中央の柱に緒をかけ、その兩端を握つて、緒よ延びよとばかり引つばつた。牛は彼の背後をくるくる廻つた。

## 三

健吉が稻を刈つてゐると、角力を見に行つてゐた子供達は、大勢群がつて歸つて來た。彼等は、歸る道々獨樂を廻してゐた。

それから暫らく親子は稻を刈りつづけた。そして、太陽が西の山に落ちかけてから、三人は各々徒荷かちんを持つて歸つた。

「牛屋は、ポツコひつそりとしとるぢやないや。」

「うむ。」

「藤二は、どこぞへ遊びに行たんかいな。」

母は荷を置くと牛部屋をのぞきに行つた。と、不意に吃驚して、

「健よ、はい來い！」と手を顫はせて云つた。

健吉は、稻束を投げ棄て、急いで行つて見ると、番をしてゐた藤二は、獨樂の緒を片手に握つたまま、暗い牛屋の中に倒れてゐる。頭がねぢれて、頭が血に染つてゐる。

赤牛は、ぢいつと鞍を背負つて子供を見守るやうに立つてゐた。竹骨の窓から夕



日が、牛の眼球に映つてゐた。蠅が一ツ二ツ牛の傍でブン／＼羽をならしてとんでゐた。……

「畜生！」父は稲束を荷つて歸つた六尺棒を持つてきて、三時間ばかり、牛をブン／＼つゞけた。牛にすべての罪があるやうに。

「畜生！ おどれはろくなことをしくさらん！」

牛は恐れて口から泡を吹きながら小屋の中を逃げまわつた。

鞍は毀れ、六尺は折れてしまつた。

それから三年たつ。

母は藤二のことを思ひ出すたびに、

「あの時、角力を見にやつたらよかつたんぢや！」

「あんな短い獨樂の緒を買ふてやらなんだらよかつたのに！——緒を柱にかけて引

つぱりよつて片一方の端から手がはづれてころんだところを牛に踏まれたんぢや。あんな緒を買ふてやるんぢやなかつたのに！ 二錢やこし仕末をしたつてなんぢやになりやせん！」といまだに涙を流す。……

(一九二五、九月)



雪のシベリア



内地へ歸還する同年兵達を見送つて、停車場から歸つて來ると、二人は兵舎の寢臺に横たはつて、久しくものを言はずに溜息をついてゐた。これからなほ一年間辛抱しなければ内地へ歸れないのだ。

二人は、過ぎて來たシベリアの一年が、如何に退痛で長かつたかを思ひかへした。二年兵になつて暫らく衛戍病院で勤務して、それからシベリアへ派遣されたのであつた。一緒に、敦賀から汽船に乗つて來た同年兵は百人あまりだつた。彼等がシベリアへ着くと、それまでにゐた四年兵と、三年兵の一部とが、内地へ歸つて行つた。

シベリアは、見渡す限り雪に包まれてゐた。河は凍つて、その上を駄馬に引かれた橇が通つてゐた。氷に滑べらないやうに、靴の裏にラシヤをはりつけた防寒靴をはき、毛皮の帽子と外套をつけて、彼等は野外へ出て行つた。嘴の白い鳥が雪の上

に集つて、何か頻りにつゝいてゐたりした。

雪が消えると、どこまで行つても變化のない枯野が肌を現はして來た。馬や牛の群が吼えたり、うめいたりしながら、徘徊しだした。やがて、路傍の草が青い芽を吹きだした。と、向うの草原にも、こちらの丘にも、處々、青い草がちら／＼しだした。一週間ほどするうちに、それまで、全く枯野だつた草原が、すっかり青くなつて、草は萌え、木は枝を伸し、鶯や鶯が、そこ、こゝを這ひ廻りだした。夏、彼等は、歩兵隊と共に、露支國境の近くへ移つて行つた。十月には赤衛軍との衝突があつた。彼等は、装甲列車で、第一線から引き上げた。

草原一面に霧がかゝつて、つひ半町ほどさきさへも、見えない日が一週間ほどつどいた。

彼等は、ある丘の、もと露西亞軍の兵營だつた、練瓦造りを占領して、掃除をし、板仕切で部屋を細かく分つて手術臺を据ゑつけたり、藥品を運びこんだりして、表へは、陸軍病院の板札をかけた。



十一月には雪が降り出した。降つた雪は解けず、その上へ、雪は降り積り、降り積つて行つた。谷間の泉から、苦力が水を荷つて病院まで登つて来る道々、こぼした水が凍つて、それが毎日のことなので、道の兩側に氷がうづ高く、山脈のやうに連つてゐた。

彼等は、ペーチカを焚いて、室内に閉ぢこもつてゐた。

二人は、來し方の一年間を思ひかへした。負傷をして、脚や手を切斷され、或は死んで行く兵卒を眼のあたりに目撃しつゝ常に内地のことを思ひ、交代兵が來て、歸還し得る日が来るのを待つてゐた。

交代兵は來た。それは、丁度、彼等が去年派遣されてやつて來たのと同じ時分だつた。四年兵と、三年兵との大部分は歸つて行くことになつた。だが、三年兵のうちで、二人だけは、やう／＼内地で初年兵の教育を了へて來たばかりである二年兵を指導するために残されねばならなかつた。

軍醫と上等看護長とが相談をした。彼等は、性惡で荒つぱくつて使ひにくい兵卒

は、此際、歸してしまひたかつた。そして、おとなしくつて、よく働く、使ひいゝ吉田と小村とが軍醫の命令によつて残されることになつた。

二

誰れだつて、シベリアに長くゐたくはなかつた。

剛膽で殺伐なことが好きで、よく銃劍を振るつて、露西亞人を斬りつけ、相手がない時には、野にさまよつてゐる牛や豚を突き殺して、面白がつてゐた、鼻の下に、ちよんびり鬚を置いてゐる屋島といふ男があつた。

「かういふこた、内地へ歸つちやとても出來ないからね。——法律も何もないシベリアでウンとおたのしみをしとくんだ。」

彼は、よく軍醫や看護長に喰つてかゝつた。ある時など、拳銃を握つて、軍醫を追つかけまわしたことがあつた。軍醫が規則正しく勤務することを要求したのが、癪にさはつたといふのであつた。彼は、逃げて行く軍醫を、うしろからねらつて、



轟然と拳銃を放つた。ねらひはそれで、弾丸は二重になつた窓硝子を打ち抜いた。

彼は、シベリアにゐることを希望するだらうと誰れしも思つてゐた。

「一年や二年、シベリアに長くゐるやうがゐまいか、長い一生から見りや、同じこつちやないか。——大したこつちやないぢやないか！」

彼は、皆の前でのんきさうにこんなことを云つてゐた。

だが、軍醫と上等看護長とは、歸還者を決定する際、イの一番に、屋島の名を書き加へてゐた。——つまり、銃剣を振りまはしたり、拳銃を放つたりする者を置いてゐては、あぶなくて厄介だからだ。

自分からシベリアへ志願をして來た福田といふ男があつた。福田は露西亞語が少し出來た。シベリアへ露西亞語の練習をするつもりで志願して來たのであつた。一種の岡太さがあつて、露西亞人を相手に語しだすと、仕事のことなどそつちのけにして、二時間でも三時間でも話しこんでゐた。露西亞語が相當出來るやうになつてから内地へ歸りたいといふのが彼の希望だつた。

けれども、福田も、歸還者名簿中に、チャント書きこまれてゐた。

さういふ例は、まだ——他にもあつた。

無斷で病院から出て行つて、三日間、露人の家に泊つてきた男があつた。それは脱營になつて、脱營は戦時では銃殺に處せられることになつてゐた。だがそれを内密にすましてその男は處罰されることからは免れた。しかし、その代りとして、四年兵になるまで残しておかれるだらうとは、自他ともに覺悟をしてゐた。

だが、その男も、歸還者の一人として、はつきり記されてあつた。

そして、残されるのは、よく働いて、使ひいい吉田と小村の二人であつた。

二人とも、おとなしくして、よく働いてゐればその報ひとして、早くかへしてくれることに思つて、常々から努めてきたのであつた。少し風邪の氣味で、退氣な時にでも無理をして勤務をおろそかにしなかつた。

——さうして、その報ひとして得たものは、あと、もう一箇年間、お國のために、シベリアにゐなければならぬといふだけであつた。



二人は、だまし討ちにあつたやうな気がして、なげやりに、あたり散らさずにはゐられない位胸がむか／＼した。

三

——汽車を待つてゐる間に、屋島が云つた。

「君等は結局馬鹿なんだよ。——早く歸らうと思へや、俺のやうにやれ。誰だつて、自分の下に使ふのに、おとなしい羊のやうな人間を置いときたいのはあたりまへぢやないか——だが、一年や二年、シベリアにゐたつてゐなくつたつて、長い一生から見れや同じこつた。ま、氣をつけてやれい。」

それをきいてゐた吉田も、小村も元氣がなかつた。

92 同年兵達は、既に内地へ歸つてから、何をするか、入營前にゐた娘は今頃どうしてゐるだらう？ 誰れが出迎へに來てゐるだらう？ つひさき頃まで熱心に通つてゐた女郎のことなど、けろりと忘れてしまつて、そんなことを頻りに話してゐた。

「俺れや、家へ歸つたら、早速、鼻を貰ふんだ。レシベリアへ志願をして來た福田も、今は内地へ歸るのを急いでゐた。

「露西亞語なんか分らなくつたつていゝや、——親爺のあとを繼いで行けや、食ひつばぐれはないんだ、いつなんどきバルチザンにやられるかも知れないシベリアなんぞ、もうあき／＼しちやつた。」

二人だけは歸つて行く者の仲間から除外されて、待合室の隅の方で小さくなつてゐた。二人は、もと／＼よく氣が合つてる同志ではなかつた。小村は内氣で、他人から云はれたことは、きつとするが、物事を積極的にやつて行くたちではなかつた。吉田は出しやばりだつた。だが人がよかつたので、自分が出しやばつて物事に容喙して、結局は、自分がそれを引き受けてせねばならぬことになつてしまつてゐた。二人が一緒にあると、いつも吉田が、自分の思ふやうに事をきめた。彼が大人顔をしてゐた。それが小村には内心、氣に喰はなかつた。しかし、今では、お互ひに、二人だけは仲よくして行かなければならないことを感じてゐた。氣に入らない



ことがあつても、それを悔へなければならぬと思つてゐた。同年兵は二人だけであつた。これからさき、一年間、お互ひに助け合つて生きて行かなければならなかつた。

「ぢや、わざわざ見送つてくれて、有がたう。」

汽車が來ると、歸る者たちは、珍しい土産ものをつめこんだ背嚢を手にさけて、われさきに列車の中へ割込んで行つた。そこで彼等は自分の座席を取つて、防寒帽を脱ぎ、硝子窓の中から顔を見せた。

そこには、線路から一段高くなつたプラットホームはなかつた。二人は、線路の間に立つて、大きな列車を見上げた。窓の中から、歸る者がそれ／＼笑つて何か云つてゐた。だが二人は、それに答へて笑はうとすると、何故か頬がヒン曲つて泣けさうになつて來た。

二人は、さういふ顔を見られなくなかつたので、黙つてむつ／＼してゐた。

……汽車が動き出した。

窓からのぞいてゐた顔はすぐ引つ込んでしまつた。

二人は、今まで押し怦へてゐた泣けさうなものが、一時に顔面に溢れて來るのをどうすることも出来なかつた。……

「おい、病院へ歸らう。」

吉田が云つた。

「うむ。」

小村の聲はめそ／＼してゐた。それに反撥するやうに、吉田は、

「あの橋のところまで馳せつくらべをしよう。」

「うむ。」小村は相變らずの聲を出した。

「さあ、一、二、三ッ！」

吉田がさきになつて、二人は、一町ほど走つたが、橋にまで、まだ半分も行かないうちに、氣ぬけがしてやめてしまつた。

二人は、重い足を引きすつて病院へ歸つた。



五六日間、すべての勤務を二年兵にまかせきつて、兵舎でぐうぐう寝てゐた。

四

「おい、兎狩りに行かうか。」

かう云つたのは吉田であつた。

「このあたりに、一體、兎がゐるんかい。」

小村は鼻の上まで毛布をかぶつて寝てゐた。

「居るんだ。……そら、つひ、そこにちよか／＼してるんだ。」

吉田は窓の外を指さした。彼は、さつきから、腹這ひになつて、二重硝子の窓から、向うの丘の方を見てゐたのであつた。丘は起伏して、ずつと彼方の山にまで連つてゐた。丘には處々草叢があり、灌木の群があり、小石を一箇所へ寄せ集めた堆があつた。それらは、今、雪に蔽はれて、一面に白く見境ひがつかなくなつてゐた。なんでも、兎は、草叢があつたあたりからちよか／＼走り出して來ては、雪の中

へ消え、暫らくすると、また、他の場所からちよか／＼と出て來た。その大きな耳がまづ第一に眼についた。でも、よほど氣をつけてゐないと雪のやうで見分けがつかなつた。

「そら、出て來た。」吉田が小聲で叫んだ。「ぴん／＼はねてるんだ。」

「どれ?……」小村は、のつそり起上つて窓のところに来た。「見えやしないぢやないか。」

「よく見ろ、はねてるんだ。……そら、あの石を積み重ねてある方へ走つてるんだ。長い耳が見えるだらう。」

二人とも、寝ることにはあきてゐた。とは云へ、勤務は阿呆らしくつて、眞面目にやる氣になれなかつた。歸還した同年兵は、今頃、敦賀へついてゐるだらうか。すぐ満期になつて家へ歸れるのだ! 二人はそんなことばかりを思つてゐた。シベリアへ來るため、乗船した前夜、敦賀で一泊した、その晩のことを思ひ出したりした。その港町がなつかしく如何にもかどやかに思ひ出された。何年間、海を見な



銃と實弾とは病院にも配給されてゐたが、それは、非常時以外には使ふことを禁ぜられてゐた。非常時といふのは、つまり、敵の襲撃を受けたやうな場合を指すのであつた。

吉田はかまはず出て行つた。小村も、あとでまたなんとかなる、——そんな氣がして、同様に銃を持つて吉田のあとからついて行つた。

吉田は院庭の柵をとび越して二三十歩行くなり、立止まつて引金を引いた。彼は内地でたび／＼鹿狩に行つたことがあつた。獵銃をうつことにはなれてゐた。歩兵銃で射的をうつには、落ちついて、ゆつくりねらひをきめてから發射するのだが、獵にはさういふ暇がなかつた。相手が命がけで逃走してゐる動物である。突差にねらひをきめて、うたなければならぬ。彼は、銃を掌の上にのせるとすぐ發射することになれてゐた——それで十分的中してゐた。

戰鬪の時と同じやうな銃聲がしたかと思ふと、兎は、一間ほどの高さに、空に弧を描いて向うへとんだ。たしかに手こたへがあつた。

いことか！ 二人は、シベリアへ來てから、もう三年以上、いや五年にもなるやうな氣がしてゐた。どうしてシベリアへ兵隊をよこして頑張つたりする必要があるのだらう。金を使つて、兵卒は、露西亞人を殺したり、露西亞人に殺されたりしてゐるのである。シベリアへ兵隊を出すことをさへ始めなければ、自分達だつて、三年兵にもなつて、こんなところに引き止められてゐやしないのだ。

二人は、これまで、あまりに眞面目で、おとなしかつた自分達のことを悔ひてゐた。出たらめに、勝手氣まゝに振るまつてやらなければ損だ。これからさき、一年間を、自分の好きなやうにして暮してやらう。さう考へてゐた。

——吉田は、防寒服を着け、彈丸をこめた銃を握つて兵舎から走り出た。

「おい、兎をうつのに實弾を使つてもいいのかい。」

小村も、吉田がするやうに、防寒具を着けながら、危ぶんだ。

「かまふもんか！」

「ア（上等看護長のこと）が怒れやせんかしら……」



「やった！ やった！」

吉田は、銃をさげ、うしろの小村に一寸目くばせして、前へ馳せて行つた。そこには、兎が臍腑を出し、雪を血に紅く染めて小兒のやうに横たはつてゐた。

「俺だつてうてるよ。どつか、もう一つ出て来ないかな。」

小村が負けぬ氣を出した。

「居るよ。一三匹も見えてゐたんだ。」

二人は、丘を登り、谷へ下り、それから次の丘へ登つて行つた。途中の土地が少し窪んだところに灌木の群があつた。二人がバリ／＼雪を踏んでそこへかかるなり、すぐそのさきの根元から耳の長いやつがとび出した。さきにそれを見つけたのは吉田であつた。

「おい、俺にうたせよ——おい！……」

小村は友の持ち上げた銃を制した。

「うまくやれるかい。」

「やるとも。」

小村は、ねらひをきめるのに、吉田よりは手間どつた。でも弾丸は誤たなかつた。

兎は、また二三間、宙をとんで倒れてしまつた。

## 五

倉庫にしまつてある實弾を二人はひそかに持ち出した。お互ひに、十發づつぐらゐポケットにしのばせて、毎日、丘の方へ出かけて行つた。

歸りには必ず獲物をさげて歸つた。

「こんなに獲つてゐちや、シベリアの兎が種がつきちまふだらう。」

吉田はそんなことを云つたりした。

でも、あくる日行くと、また、兎は二人が雪を踏む靴音に驚いて、長い耳を垂れ、草叢からとび出て來た。二人は獲物を見つけると、必ずそれをのがさなかつた。

「お前等、弾丸はどつから工面してきちよるんだ？」



上等看護長は、勤務をそつちのけにして獵に無中になつてゐる二人を暗に病院から出て行かせまいとした。

「聯隊から貰つてきたんです。」吉田が云つた。

「この頃、パルチザンがちよい／＼出沒するちゆうが、あぶないところへ踏みこまないやうに氣をつけにやいかんぞ！」

「パルチザンがやつて來れや、こつちから兎のやうにうち殺してやりませ。」

冬は深くなつて來た。二人は狩に出て鬱憤を晴し、退屈を凌いだ。兎の趾跡は、次第に少くなつた。二人が靴で踏み荒した雪の上へ新しい雪は地ならしをしたやうに平らかに降つた。しかし、そこには、新しい趾跡は、殆んど印されなくなつた。「これぢや、シベリアの兎も種がつきるぞ。」

二人はさう云つて笑つた。

一日、一日、遠く丘を越え、谷を渡り、山に登り、さうして聯隊がつくりつけてある警戒線の鐵條網をくゞりぬけて向うの方に出かけて行きだした。雪は深く、膝

から腰にまで達した。二人はそれを面白がり、雪を蹴つて濶歩した。

獲物は次第に少くなつた。半日かかつて一頭づつしか取れないことがあつた。さういふ時、二人は歸りがけに、山の上へ引つかへして、ヤケクソに持つてゐるだけの彈丸をあてどもなく空に向けて發射してしまつたりした。

ある日、二人は、鐵條網をくゞつて谷間に下つた。谷間から今度は次の山へ登つた。見渡すかぎり雪ばかりで、太陽は薄く弱く、風はなく、たゞ耳に入るものは、自分達が雪を踏む靴音ばかりであつた。聯隊が駐屯してゐる町も、病院がある丘も、後方の山にさへぎられて見えなかつた。山の頂上を暫らく行くと、又、次の谷間へ下るやうになつてゐた。谷間には沼があつた。それが氷でもれ上つてゐた。沼の向う側には雪に埋れて二三の民屋が見えた。

二人は、まだ一頭も獲物を射止めてゐなかつた。一度、耳の長いやつを狩り出したのであつたが、二人ともねらひを損じてしまつた。逃げかくれたあたりを追跡してさがしたが、どうしても兎はそれから耳を見せなかつた。



「もう歸らう。」  
 小村は立ち止まつて、得體の知れない民屋があるのを無氣味がつた。  
 「一匹もさげずに歸るのか、——俺れやいやだ。」  
 吉田は、どん／＼沼の方へ下つて行つた。小村は不承無承に友のあとからついて行つた。  
 谷は深かつた。谷間には沼に注ぐ河があつて、それが凍つてゐるやうだつた。そして、川は、沼に入り、それから沼を出て下の方へ流れてゐるらしかつた。下つて行く途中、ひよいと、二人の足下から、大きな兎がとび出した。二人は思はず、銃を持ち直して發射した。兎は、ものゝ七間とは行かないうちに、射止められてしまつた。

二人の弾丸は、殆んど同時に、命中したものらしかつた。可憐な愛嬌ものは、人間をうつ弾丸にやられて、長い耳を持った頭が、無残に胴體からちぎれてしまつてゐた。恐らく二つの弾丸が一寸ほど間隔をおいて頸にあつたものであらう。

二人は、血がたら／＼雪の上に流れて凍つて行く獲物を前に置いて、そこで暫らく休んでゐた。疲れて、のどが乾いてきた。

「もう歸らう。」小村が促した。

「いや、あの沼のところまで行つてみよう。」

「いや、俺れや歸る。」

「もうすぐそこぢやないか。」

さう云つて、吉田は血がなほした／＼つてゐる獲物をさげて、立ち上りしなに、一寸、自分達が下つて來た山の方をかへり見た。

「おやツ！」

彼は思はず驚愕の叫びを發した。

彼等が下つて來るまで、見渡す限り雪ばかりで、犬一匹、人、一人見えなかつた山の上に、茶色のひげを持った露西亞人が、毛皮の外套を着、銃を持つて、こちらを見下してゐるのであつた。それは馬賊か、バルチザンに相違なかつた。



た。しかし二人は、兎をうつ時のやうに、微笑むやうな心持で、樂々と發射する譯には行かなかつた。ねらひをきめても、手さきが顛へて銃が思ふ通りにならなかつた。十發足らずの彈丸は、すぐなくなつてしまつた。二人は銃を振り上げて近づいて來る奴を殴りつけに行つたが、間もなく四方から集つて來た力強い男に腕を掴まれ、銃をもぎ取られてしまつた。

吉田は、南京袋のやうな臭氣を持つてゐる若者にねじ伏せられて、息が止まりさうだつた。

大きな眼に、すごい輝やきを持つてゐる頑丈な老人が二人を取りおさへた者達に張りのある強い聲で何か命令するやうに云つた。吉田の上に乗るかぶさつてゐた若者は、二三言老人に返事をした。吉田は立てらされた。

老人は、身働きも出來ないやうに七八本の頑固な手で掴まれてゐる二人の傍へ近づいて執拗に、白狀させねばおかないやうな眼つきをして、何か露西亞語で訊ねた。吉田も小村も露西亞語は分らなかつた。でも、老人の眼つきと身振りとで、老人

小村は、脚が痲痺したやうになつて立上れなかつた。  
「おい、逃げよう。」吉田が云つた。  
「一寸、待つてくれ！」  
小村はどうしても脚が立たなかつた。  
「おぢるこたない。大丈夫だ。」吉田は云つた。「傍へよつてくれや、うち殺してやる。」  
でも、彼は慌てゝ逃げようとした。だが、こちらの山の傾斜面には、民屋もなにもなく、逃げる道は開かれてゐると思つてゐたのに、すぐそこに、六七軒の民屋が雪の下にかくれて控へてゐた。それらが露西亞人の住家になつてゐることは、疑ふ餘地がなかつた。

山の上の露西亞人は、散り々々になつた。そして間もなく四方から二人を取りかこむやうにして近づいて來た。

吉田は銃をとつて、近づいて來る奴を、ねらつて射撃しだした。小村も銃をとつ



「助けて！」  
 「助けて！」  
 「助けて！」

小村も彼のあとから走りだした。

向うへ行つた二人の若者は銃を持ち上げた。

二人に無關心になつてきた。

露西亞人には、二人の哀願を聞き入れる様子が見えなかつた。老人の凄惨な眼は、二人に無關心になつてきた。

つてゐた。他の二人の若者は、銃を持つて、少し距つた向うへ行きかけた。

吉田は、あいつが自分達をうち殺すのだと思つた。すると、彼は思はず、聞き覚えの露西亞語で「助けて！ 助けて！」と云つた。だが、彼の覚えてゐる言葉は正確ではなかつた。彼が「助けて」(スバシーテ)といふつもりで云つた言葉が「有がたう」(スバシーボ)と響いた。

露西亞人には、二人の哀願を聞き入れる様子が見えなかつた。老人の凄惨な眼は、

袴下、靴、靴下までもぬがしにかゝつた。

……二人は雪の中で素裸體にされて立たせられた。二人は、自分達が、もうすぐ射殺されることを覺つた。二三の若者は、ぬがした軍服のポケットをいち／＼とさぐ

その語調は知らず／＼哀願するやうになつてきた。

老人は若者達に何か云つた。すると若者達は、二人の防寒服から、軍服、襦袢、袴下、靴、靴下までもぬがしにかゝつた。

「ネボニマール」吉田は繰返へした「ネボニマール」(分らん)と云つた。

老人は、暫らく執拗な眼つきで、二人をじろ／＼見つめてゐた。藍色の帽子をかむつてゐる若者が、何か口をさしはさんだ。

が、彼等の様子をさぐりに二人がやつてきてゐたと疑つてゐることや、町に、今、日本兵がどれ位駐屯してゐるか二人の口から訊かうとしてゐることが察しられた。かうしてゐるうちにでも日本兵が山の上から押しかけて来るかもしれない。老人は、そんなことにまで氣を配つてゐるらしかつた。

吉田は、聞き覚えの露西亞語で、「ネボニマール」(分らん)と云つた。

老人は、暫らく執拗な眼つきで、二人をじろ／＼見つめてゐた。藍色の帽子をかむつてゐる若者が、何か口をさしはさんだ。



二人はさう叫びながら雪の上を走つた。だが、二人の叫びは、露西亞人には、

「有難う！」

「有難う！」

「有難う！」

と聞えた。

……間もなく二ツの銃聲が谷間に轟き渡つた。

老人は、二人からもぎ取つた銃と軍服、防寒具、靴などを若者に纏めさせて、雪に埋れた家の方へ引き上げた。

「あの、頭のない兎も忘れちゃいけないぞ！」

六

80 三日目に、二個中隊の將卒總がかりで、やうく探し出された時、二人は生きてゐた時のまゝの體色で凍つてゐた。背に、小指のさき程の傷口があるだけであつた。

81

顔は何か呼びかけるやうな表情になつて、眼を開けたまゝ固くなつてゐた。

「俺が前以て注意をしたんだ、——兎狩りにさへ出なけれや、こんなことになれやしなかつたんだ！」

上等看護長は、大勢の兵卒に取かこまれた二人の前に立つて、自分に過失はなかつたものゝやうに、さう云つた。

彼は、他の三年兵と一緒に歸らしておきさへすればこんなことになりはしなかつたのだ、とは考へなかつた！

彼は、二個の兵器、二人分の被服を失つた理由書をかゝねばならぬことを考へてゐた。

(一九二七、三月)



村の網元



鹿太郎の村は、大阪から五十里ばかり距つてゐる瀬戸内海の或る島にあつた。汽船は、手を伸ばせば届く位近く島とすれすれに通つて行つた。甲板から見ると、島の村は如何にもどかさうだつた。潮に洗はれた岩の上に青い松が生えてゐた。海岸にそふた谷間に四五十戸づゝの部落があつた。白砂の濱邊には網が干してあつて、漁舟はそこかしこにもやつてゐた。海上には、航路の近くで、漁舟が汽船の波にもまれながら、櫂を押ししたり、網を引いたりしてゐた。筋肉のたくましい漁夫が、小さい木葉のやうな小舟から汽船の旅客達を見上げたりすることがあつた。その妻らしい女が腰袋をあてて一緒に網を引いてゐたり、赤ん坊を古い行李の蓋に寝かしてあるのを旅客達は見受けることがあつた。

「のんきさうですね。……かういふ島で暮してみたいもんだ。」旅客は思はずかう呟いて、島の方をすつと眺めまわしたりした。

島の小山には祠があつて、赤や白の長い旗が微風にひら／＼とひらめいてゐた。しかし、實際村に入つて見ると、人の生活はさうのんきなものでないのは云ふまでもなかつた。村民は、昔から半農半漁で村を立ててゐるが、近年都會から押し寄せて来る波はかういふ津々浦々をまで襲はずには置かなかつた。村の青年には、祖先來の家業を放擲して、都會へ飛び出て行く者が少くなかつた。東京の私立大學に苦學して辯護士になつた者もあつた。ある者は、何とかいふ銀行の支配人になつてゐた。またある者は大きな石材問屋をやつてゐた。中には、大阪の電車の中で、ある女の簪を掏つてゐたところが、おかしいことにはその女が掏摸の女親方であつて、掏り方のあざやかさを見込まれ、つひにその仲間に入つて、今では一方の頭になつてゐる變り者もあつた。けれども村を棄てて出て行つた者で、所謂成功して歸るのは五指を屈するにも足りなかつた。多くの者は何處へ行つたか行衛不明になつたり、或は監獄部屋へ入つたり、或は最後の着物まで叩き賣つて、裸一ツで歸て來たりした。



鹿太郎の長男の健助もその一人だった。彼の家は村の網元で、不動産も相當に有り、現金も有つて村では幅を利かしてゐた。春の鱒網が出る時と、夏の鱒網の盛り時には、彼の家に出入りする者が三十人を下らなかつた。さうして村の人達は殊更に旦那とか、御領ンさんとか云つて鹿太郎一家の者を持ち上げた。魚の一匹でも貰ひたがつてゐるのである。

健助は、その父のあとを繼いで行くだらうと村の人々は思つてゐたが、徴兵検査がすむとまもなく結婚して大阪へ行きたいと云ひ出した。すると、「若い者はやり度いことをやるがえいわい。」と鹿太郎は一言のもとに息子の申出を承諾してしまつた。

鹿太郎は、まだ若くて——四十五そこそこだつた——頑丈で、働き盛りだつた。息子の手助けなしに、十分家業をやつて行くことが出来た。彼は金儲けにかけては抜け目がなかつた。そして漁業の外に酒醬油や米を仕入れて、次男の佐吉に賣らせた。彼に使はれてゐる漁夫達は、無理にでも佐吉の店でそれ等の物を買はせられた。

佐吉は少しほんやりした常に口をポカンと開けて空を見てゐる男だつた。

「佐アヤん、また飲ましておくれんか。」酒好きな漁夫達はボケ／＼云ひながら佐吉の店へやつて來た。店は主家から二丁ばかり距つてゐた。

「よう飲む奴ぢやな。勝手に樽から出して飲めえ。」佐吉は、店の外に出て、そこらぶらぶら歩きまわつたり、沖の様子を眺めに行つたりした。

「ほんまに勝手に出してもえいかい。」  
「を、好きなだけ飲めえ。」

漁夫は、微笑を浮かべながらなみなみとコツプに酒を注いで飲んだ。彼等は佐吉の眼を胡魔化してコツプに一杯でもよけいに飲めるのをたのしみに、よく店へやつて行つた。しかし、佐吉の無關心は却つて彼等を釣るやうなものだつた。そのために、一と夏働いた賃銀を悉く酒代に入れ上げてしまふ漁夫なども有つた。



健助が結婚して大阪へ出て行つたのは、かういふ風だつた。——  
 村のはづれに近く家ごみから一軒だけとび離れて、健助の従兄弟の良次の家があつた。良次の父が在世中には鹿太郎と共同で網元をやつてゐたが、良次が十五の時、父は、T市の病院で盲腸炎の手術中突然死んでしまつた。母親のこみつは早く息子に嫁を貰つて落ちつかせたがつてゐた。相手には彼女から遠縁にあたる静香といふ色白の、手足が小さい、指が丸くて細い美しい娘が選ばれてほゞ話がついてゐた。良次も自らそれを望んでゐた。静香は彼より三ツ下だつた。村の娘達が結婚前にたいてい大阪へ奉公に行くやうに、彼女も二年ばかり大阪に行つてゐた。人のいゝこみつは良次の徴兵検査がすめば、静香が大阪から歸つて息子の嫁に来て呉れることに思つて安心してゐた。ところが、もうあと僅かといふ時になつて、静香は寝返りを打つた。——貧乏をすると人は親戚関係など無視されて、踏み付けにされ勝ちなものである。——健助が静香と結婚するといふ噂が村中にひろまつた。

大師講に參つて、それを聞いた母親は、家へ歸ると薄暗いランプの心をかき上げ

て、もう晝間の疲れで寝てゐる良次を起してその話をした。良次は母の話をきくと眠い眼が急に冴えてきた。彼は胸が息づまりさうになるのを禁ずることが出来なかつた。母親は亢奮して頬骨のとび上つた顔を紅らめて険しい息づかひをしてゐた。

あくる朝早く、母親は鹿太郎の家へ噂をたしかめに行つた。

「そちにや、そんなこと云ふけんど結納も何も持つて行とりやせなんだらうがい！」  
 鹿太郎はこみつの言葉を聞いてから言つた。「……俺りやそんなこと知らんせに話をきめてしまふたがい。われや約束をした云ふんけんど、たゞ口先だけの約束で結納も何も持つて行がすにおいて、そんなことで、何でほんまの約束になるもんぞい！」  
 「ほいたつて、家とお前んとはイツケ（親戚の意味）ぢやし、うらもこれまで再々静香はうちに貰ふ云ふて話しといたのに……」さう云ひながらこみつは知らずく熱い涙をこぼした。

「さうかいや、俺等、皆目そんな話は聞かなんだがいや。」と鹿太郎は白ばくれた。  
 「そんなんぢやつたら家の健助にや他になんほでも嫁は有るせに譲つてもえいんぢ



やけんど、もう結納までやつとるのにそれを取り戻す譯にも行かなやれ。」

鹿太郎はさう云つて、何かおかしさうに癩高く笑つた。

「阿呆くらゐめが、靜香が、良次のやうな無男の貧乏たれへ嫁に行くもんかい！」こみつが歸つたあとで鹿太郎は妻と二人でこんなことを云つて笑つた。

靜香を良次の嫁に貰ふといふ話は、彼等も前々からきいてゐた。しかし、健助が靜香を慾しさうな口吻をもらすと、息子の希望を抑制するどころではなかつた。彼等は、金の力で利く自分等の羽振りを見たがつてゐた。見て自ら楽しみたがつてゐた。

90 靜香は大阪へ行つてから、僅か二年ばかりのうちに急に都會化して、何かにつけて都會好みをするやうになつてゐた。健助はさういふことも知つてゐた。そして結婚すれば田舎の家は弟にまかして都會へ出て行くといふやうなことまで仲介者を通じて女に知らせた。靜香の親達も貧乏でつひすると食ひはぐれさうな良次よりは網元の總領の健助の方が遙かに望ましいといふやうなことをひそかに考へてゐた。

夏の初めの麥刈りと、田植で忙しい時に華かな結婚式が擧げられた。向ひの、T市から、呉服屋の手代が二人、ボテに三杯も反物を入れて、一日に三回往復する發動機船で村へやつて來た。鹿太郎と佐吉とは羽二重の紋付の羽織と、絹平の袴とを持へた。鹿太郎の妻は桐紋の入つた黒の錦紗縮緬の羽織をこしらへた。靜香の仕度に必要な物も、滅茶々に値切つて買はせた。手代はあまりひどく値切られたので、聲を荒立て、鹿太郎と云ひ合つたりしたが、つひに空のボテを持つて、舟賃も儲らない商賣をしてすく／＼歸つて行つた。

「もう二度と來りやせん！」二人は發動機船に揺られ乍ら腹立たしさうに呟いてゐた。「鹿太郎つて、ろくな奴ぢやない！」

健助は、つひ三四ヶ月前、青年團の透寫版刷りの雑誌で、向う三ヶ年間禁酒するとさもえらさうに宣言してゐたが、縁談が纏ると、すぐ前言を翻へして、到る處でぐでぐ／＼飲んだくれた。そして、何故禁酒をやめたか訊す者があると、

「何でえ、野暮くさいことを聞きやがつて！……譯がきゝたけりや家へ來い。何ほ



でも理由を聞かしてやらあ！」と腕まくりをした。「この健助を何と思つてるんだ。網元などで満足して田舎に燻ぶる健助ぢやないんだ。辯護士がなんだ、銀行の支配人が何んだ！」

彼は酔つて呂律のまわらない舌でさう云つて袖を肩までまくり上げた。彼の酔態と空威張りとは見つともないものだつた。

しかしきちつと服装を整へて座敷に坐ると、彼の男振りはなか／＼良かつた。面長の顔は血色が良く、元気で、賢さうだつた。結婚式のあくる日には村中の女を御馳走に呼んだ。漁夫の妻や、百姓の婆さん達は、屋敷に一杯になつて、酒に浮かれて、歌つたり踊つたりした。健助と静香とは盛装をして女達の前で挨拶をした。二人が揃つて座敷へ出て行くと、今まで騒いでゐた村の女達は急に静まつて花嫁花婿の顔を注視した。

「嫁さんもきれいが、婿さんもえい男ぢや。」彼女達は宴會がすんで歸る道々噂をしあつた。あゝいふ二人が夫婦になるのは當然であるやうに考へてゐた。静香が良次

の嫁になる話があつたことなどは全然忘れてしまつてゐた。そして彼女等の中に良次の母のこみつだけ一人混つてゐないことにも氣づかなかつた。

やがて新夫婦は連れだつて大阪へ行つてしまつた。健助はいさ故郷を出て行く段になると多少躊躇したが、静香は自ら進んで健助を促したてた。

その當座、村の一部の女達の間には、村はづれの一軒屋で毎晩灯の消えたまつ暗い部屋から母親と良次とがしやくり泣く聲が聞えるといふ噂が傳つた。……

けれども、良次はその年の暮れに結婚した。この村から三里ばかり向うに大阪からの汽船が着く港がある。女はその港のある貧しい漁夫の娘だつた、彼女は美しくはなかつたが、内氣な、氣だてのいゝ小柄な女だつた。結婚は極めてさゝやかに行はれた。村の人達は、花嫁が翌日小舟に網を積む良次の手傳ひをしてゐるのを見て、始めて結婚があつたのを知つた位だつた。良次は結婚しても別に嬉しさうでもなければ、また落膽してゐるやうでもなかつた。彼は結婚式の前日まで海鼠を捕りに行つてゐたが、その翌日も何等變つたことがなかつたやうに海鼠を捕りに小舟を沖



へ乗り出した。海鼠は正月を前にして値が出てゐるのだつた。

三

それから二年経つ。

佐吉一人では商賣の方を萬端整理しに行くことが出来なかつた。佐吉にはもともと祖父の隠居金が五千圓ばかり、祖父がなくなると共に彼の所有になつてゐたので働かなくても利息で食つて行ける位だつたが、鹿太郎は息子を遊ばしてはおかなかつた。そして商賣の方をもつとうまくやるために、商才のありさうな娘を探した。やがてまたしても色白の美しい娘が選ばれて話が纏つた。そして健助の時のやうに華やかな結婚式が挙げられた。健助夫婦は、わざわざ大阪から歸つてきた、靜香は二年前の娘らしさはなくなつたが、何だか下品に圓熟して、一種癖のある落ち着きが出来てゐた。なまたれた大坂辯を殊更誇らしげに使ひながら、義妹の衣装の着付けを手傳つたり、よけいな口をきいたりした。上品振る言葉のかけから、「まあ、

これ何處で買ひなはつたんな。……ちよつとよろしおまつけど……」と 他人の着物の袖をひねつて輕蔑するやうな調子を見せ、人々をいやがらせた。また、隣村の料理屋から持つて來た料理に文句を云つて、料理人を怒らしたりした。その癖、料理人が腹立てて途中で獻立を放つたらかして歸りかけると子供のやうにたゞをこねて泣き出した。……

佐吉の妻は政江といふ名だつた。鹿太郎が彼女に商才があると見込んだのは誤つてゐなかつた。彼女は結婚式がすむ早々店に坐つて、漁夫や、村の人々や、ひよいと店の前を通る隣村の人達にまで愛相を云つた。見すほらしい風をした村のぢいさんも、彼女の愛相がいゝのを喜んだ。

佐吉は、店を妻に任してホガホガ海邊を歩いたり、小學へ通つてゐる子供と一緒に傳馬で章魚を捕りに行つたりした。しかし彼はそんなことをしてゐながら、ふと思ひ出したやうに妻が坐つてゐる店へ一人で急いで歸つて行つた。

「おつさん！ 傳馬は何處イ乗つて行くんどの？」崖端に傳馬と共に残された子



供達は當惑してあとから彼に叫びかけた。

「おつさん！ 俺等だけ放つといてどないしたらえいんどの……傳馬を流してしまふぞ。」

子供達は頻りに彼の背後から叫びかけた。併し、佐吉は、全然そんなことが聞えないものゝやうに海邊の岩の上をびよんぐとんで、畦道へ出て村へ歸つて行た。

「佐アやん！ 佐アやんの阿呆！ 佐アやんの阿呆！」やがて子供達がこんな風に叫ぶ聲が海の上から聞えてきた。

店に歸ると、彼は妻の前に立つて、ちつと彼女の頭から膝まで眺めてゐた。

「まあ、お前さん……」政江は微笑みながら彼を見上げた。「お前さん。」

「何でえ？」

「お前さん、店がこんなんぢやお客さんが這入つて來にくいせに、もつと間口一つばいに擴けたらえいわ。……よう擴けたらえいわ。」

「うむ。」

「ほいてのう、品物ぢやつて菓子や果物や乾物やかい、もつと仰山置いたらえいわ。……ほんまに賣れるに違ひないわ。置いたらえいわ。」そして彼女は、口をポカんと開けてゐる夫をちつと味はふやうに眺めやつた。がさうかと思ふと、彼女は急に立つて頭を下げだすのだつた。

「へえ、へえ、おいでなされ、……えいお天氣ござります。何がお入りやうで……へえ、お掛けなされ……」彼女は佐吉の存在を忘れてしまつたかのやうに客の顔色に、ばかり目を注いでゐるのだつた。

健助は、弟の結婚がすんでからも、大阪へ歸らうとしなかつた。彼は宴會の席に弟とは關係のない人を連れてきて酒を飲ました。五六日間、ぶつ續けの宴會が終つてからも毎日外に出て誰れかと飲んだり話したりしてゐた。併し彼はこれまでのやうにぐてぐてに酔つ拂ふやうなことはなかつた。彼は酒を飲んでゐながら、時々、不圖何者かに襲はれるやうに憂鬱になつて黙りこんだ。そして「畜生！」と獨りで呟いた。こんな彼の様子を見ると傍にゐる者も何か不吉なことが襲つて來さうに感じ



られて憂鬱になつた。彼は大阪でどういふ仕事をやつてゐたか訊ねられると、「信託事業をやつとるんぢや。……今度俺等の知り合ひで株式合資會社を作るんぢやが、なか／＼儲る商賣だぜ。俺はその發起人の一人なんぢやが、お主等も株を持たんか……」こんなことを云つた。そして、三日間に七千圓儲けた話や、五時間で三千圓せしめた話をさも自分が本當に儲けたかのやうに調子にのつてやりだした。

「そりや健やん、相場かいの？」村の人々は儲け話に釣りこまれて耳を傾けた。

「さうぢや。まあ相場のやうなもんぢやが。」

「ほう、儲るもんぢやな。……五時間に三千圓！……一時間に六百圓か、一分間に十圓儲ける譯ぢやな。」物好きな村の人はこんな考へ方をした。

「ぢやが、また相場は損すると大したもんぢやからな。」

「いゝや、そんなことない。」健助は急いでさへぎつた。「俺等の信託は固いせに滅多に損をするやうなこた有りやせん。」

彼は、明日たつと云ひ出してからも、一週間ばかり出發を延ばした。村の金が有

りさうな家はたいてい残らず彼の訪問を受けてゐた。弟の佐吉も、彼から内所事のやうな相談を持ちかけられたのは云ふまでもなかつた。佐吉は兄のために祖父から譲り受けた金を半ば以上用立てた。ところがいよ／＼出發する前日になつて、また健助はやつて來た。

佐吉の店には大工が來て間口を擴げたり、酒樽を置く臺を作つたりしてゐた。佐

吉は空を見ながら店の前をぶら／＼往き來してゐた。

「こりや日和が曇るやら知れんぞ。」

健助は弟を家の中に呼んで再び金の話をした。

「お父うに問うてみい。お父うがえい云ふたら持つて行つてもえいわい。」佐吉は無

關心に答へた。

「お父うにや問ふてみたがな。勿論えいといふ話ぢや……」

「うむ、さうかい。そんなら持つて行けい。」

「よし、儲けたら倍にもして戻してやるわいや。今のうちに出しとけや損にやなら



ん。」

出かける日には健助はもう憂鬱に沈んでもらなければ、不意に考へ込みもしなかつた。そして、何か仔細らしく村の代書人と話しながら三里ばかり向ふの港へ歩いて行つた。代書人は、代書の外に金銭貸借の周旋や、不動産賣買の周旋などもやつてゐた、何かの賣買に際して、代書人が一つ言葉を掛けると、必ず賣買代金の五分に相當する口錢を取り上げねばおかないといふので、村の人達は彼を恐れてゐた。代書人は時々氣味悪くけらげら笑つた。すると、それにつれて健助も笑つた。佐吉夫妻と母親と靜香とはそのあとから荷物を持つてついて行つた。健助は、今日は佐吉とは用事がないやうに口を利かなかつた。鹿太郎はあとから追ひ付いて來た。「お前はもう出て行かずに、家で網の手傳ひをして呉れりやえいんぢやがのう。」鹿太郎は道々息子にさう繰り返へした。「さう云ふても、俺が行かには會社の方で困るんぢや、あつちぢや、もう俺が來るかと思ふて頸を長うして待つちよるだらう。」

「ふむ、——お前もなか／＼えらうなつた。ぢやが、俺も次第に年が寄るといふことを考へて貰はにやならん。」

「それや考へとるんぢや。ぢやがもうあと三年辛抱しておくれ、さうしたら俺もどつさり儲けて戻つて來る。」

「谷澤子爵はん知つてゐやはりまつか。」と靜香が口を挟んだ。「わてら谷澤子爵はんの來やはつた宴會に行たことおますねえ。……それから、よう新聞に出てまつしやらう、杉さんや日野さん、——あんなえらい人ともわて等交際してまんねえや。」  
「そんなら達者で行てこい。……損せんやうにのう。」健助が艇に乗る時、鹿太郎はさう云つて別れを告げた。

もう夜だつた。送つて行つた者達は、海岸の崖の上から沖で艇を待つてゐる汽船のイリュミネーションを眺めた。艇は提灯をぐるぐる廻しながら汽船に近づいて行つた。櫓を漕ぐ音がぎい／＼海の上を傳つてきた。汽船の灯はきら／＼海に映つて波に碎けてゐた。



やがて汽船は短い汽笛を残して港を出て行つた。甲板のイルミネーションはさつと消えて、青と赤との航海燈ばかりが徐々に島から離れて行つた。四人はその青と赤との灯を振りかへりながら歸途についた。

「お前さん、四千圓もお金を證文一つ取らずに貸しても良かつたんけえ。」淋しい海岸の道を歩きながら政江は佐吉により添つてきいた。

「かまふもんか。兄弟ぢやないか？」と佐吉は大きな聲で云つた。

「さう。」

#### 四

102

八月の或日の午後、良次は妻の道代と一緒に彼女の里から歸りかけた。二人は前日、港の氏神のお祭りに招かれて來たのだつた。道代は今年二つになる子供を背負つて——彼等にはもう子供が出來てゐた——父親の家から歸りかけて一寸伯母の家へ立ちよつた。良次は妻の里で貰つた御馳走や、果物を両手に提げて道で待つてゐ

103

た。彼はもう今では道代との生活に馴れてゐた。鼻の小さい唇の反りかへつた顔も彼には愛嬌があるやうに思はれた。そして靜香を思ひ出すやうなこともなく、健助や叔父の鹿太郎を恨んだりもしなかつた。道代はなかく出て來なかつた。良次は海邊に出てほつ／＼歩いた。ここ一ヶ月ばかり漁がなくなつて、港の漁夫達は日蔭の涼しい處で網を直したり、寝ころんだりしてゐた。彼は汽船の待合所の前まで行つて、そこに投げ出してある蓆に抱んだ貨物に腰かけた。待合所の中では船を待つ乗客が三四人何か話しあつてゐた。

「今から去ぬんか。」通りかゝつた見知り越しの漁夫が良次に聲をかけた。「××にやこの頃漁はあるかいや？」

「いや、ほんのほつ／＼ぢや。」

乗客の一人が良次の方を見て、一寸二人の話に耳を傾けた。そして、やがて××(村の名)から聯想したかのやうに、他の乗客に向つて、「××の健助のう、あいつは堂島で定期をやりよつたが、この頃負けて家も屋敷もとばしてしまふぢやらうと



いふ話ぢや。」と云ひだした。

「一と息は儲けとつたいふ話ぢやないか。」と、鼻先の赤い鬚のある乗客が云つた。

「それも話ぢやらう。……なんにしる負けたら蛭に鹽かけたやうに悄々として、戻つて親爺の金を引つぱり出してはまた景氣のえいことを云ふて出て行きよつたんぢや。……何遍戻つて錢を持ち出したやら知れんといふこつちやないけえ。」

良次はぢつと耳を傾けてゐた。見たところ、その客はこの島の者で、大阪か神戸で店舗を張つてゐるらしかつた。

「ほう……それでやつぱり大阪に居るんかいな？」と鼻の赤い男がきいた。

「つひ、このあひだ夜抜けをしたといふ話ぢやで……」

「鹿さんは慾しろで、錢儲けにかけては抜け目がなかつたんぢやが、息子がさうして使ふてしまふて丁度えいわい。はゝゝ。」他の一人が笑ひ出した。

「さあ去ぬかよ」丁度そこへ道代が南瓜を風呂敷に包んでやつて來た。

「またそれを貰ふたんか？」一町ほど行つて良次はきいた。

「えゝ、あんまりうまさうな南瓜ぢやせに」と道代は笑つてみせて、「これあんた持つておくれ……わたしお重を持つわ。」

「うむ。」良次は云はれるまゝに南瓜を持つた。それは重箱よりはよほど重かつた。

「とても重たいぢやないか。」

「えゝ。子供を負ふてそんな重たい物を持つたら肩が凝つて仕様がなない。」

日が暮れて二人は××村に歸つた。海邊の網納屋にまだ灯がついてゐた。漁夫達が何かがやゝ騒いでゐた。しかし、鰯がとれたけはひもなければ茹でた臭ひもしなかつた。漁夫達は砂の上に蓆を敷いて肌ぬぎのまゝで坐つてゐた。

「おい、良ちやん！」一人の若い漁夫が網納屋の裏を通つて行く良次を見つけて云つた。

「どうしたんぢや。今頃そんなに皆で集つて？……」

「どうしたも、かうしたもあるもんか。親方が賃を拂ふて呉れんのぢやないけえ。」と肥つた漁夫が云つた。「もう先々月分から一文も拂ふて呉れんのぢや。……あんま



り俺等を踏み着けにするせに、腹いせに、網舟の横腹に孔をあけて、ぶち沈めてやらうかと思ふとるんぢや。」

「こんなこつちや盆が來よるのに、佛さんに團子を供へることも出來りやせん。」と年の行つた漁夫は嘆息した。

「ふむ……今さつき汽船の待合所で聞いてきたんぢやが、健助が相場に負けて夜逃げしたといふこつちやぞ……網元の家屋敷もとんでしまふぢやらうつて……」

「うむ、それで分つた！」と漁夫達は激昂した。「それで俺等に賃を呉れんのぢや。今年は鯛ぢやつて賃を出して餘る位は取れとるんぢや、……それに、息子が相場に負けた飛沫を俺等に掛けやがる！……家にや喚も子供も食ふ米が無うて泣つきよるんぢや！……」

「さあ、去なういの。」と道代が促した。

「まあ、よう話して賃だけは貰ふようにすりやえい。」さう云つて良次は家へ歸りかけた。

「お前さん、家に貸しとる二百圓も戻して呉れんやら知れんぞよ。」歩きながら道代は良次に云つた。

「さあ。でも家には代書の手から貸しとるんぢやせになあ。」

「釣をしたり海鼠を漕いだりして二圓や三圓宛溜めた錢ぢやのに、取られたら惜しいわ。」

「うむ。」

「利子の代りに佐吉つあんの店から米でも貰ふとかうか。米はどつちみちいるんぢやせに。」突差に道代はこんなことを思ひついた。

二人は店の方に廻つてみた。まだ宵だのに店は戸を閉め切つて隙間からほんやり光がもれてゐるばかりだつた。

「ごめん！ ごめん！ 今晚は、ごめん！」戸を叩いても返事がなかつた。二人は暫らく停んでゐた。

と其處へ、さつきの年の行つた漁夫の喚が素肌の上に子供を背負つてやつて來た。



「おしまい。」鼻は道代に挨拶した。「店にやもう寝たんかな。」  
 「寝たんぢやらう。呼んでも返事がない。」と良次は云つた。  
 「おしまひ、おしまひ。ごめん！」鼻は激しく戸を叩いた。と、やがて、内からとごと音がして誰か戸を開けに來た。  
 「何どな！」口をポカンと開けた佐吉が顔を出した。店にはホヤの曇つた二分芯のランプがともつてゐた。そして、つひ一昨日まではそこら中に米俵や雜貨や乾物類が澤山積んであつたのに、今はすっかり何處かへ持ち去られて、がらんとしてゐた。  
 「政江がねんねを産んでなあ。」佐吉は戸口に立つてゐる者に何か嘆願するやうに云つた。

「米は無いんかな？」鼻が訊ねた。

「もう何んぢや無いんぢや。」

「どうしたんぢや？」と良次は訊ねた。

「何か知らんけど、お父うが何處へやら持つて行てしまふた。」

「酒もないんかな？」

「この樽は空ぢや。」佐吉はかん／＼空樽を叩いた。

良次は店の中に入つてそこらあたりを眺めまわした。そこには空箱や空罎やがらくたばかりが置いてあつた。

「此處にこんなんが残つとら。」佐吉は片隅から石油の入つた罐を出して來た。

「家にや石油も要るんぢやつた。」と漁夫の鼻は云つた。

「家にも石油を貰ふとかうか。」と道代は良次の眼を見て云つた。

やがて、半分宛分けた石油を空罎に入れて、二人は店を出た。……あとには佐吉が店の前をぶら／＼星空を眺めながら歩いてゐた。

「日和はどうかしらん……」

## 五

盆が來ても、今年だけは踊りもなかつた。村は何んだかさびれたやうに見えた。



人々は到る處で、二三人集ると網元の破産話を持ち出した。これまで鹿太郎を憚かつて、金を貸してゐ乍ら黙つてゐた者も、いざ貸した金が元金だけ廻收されるか否か危ぶまれて來ると、それぞれ自分の貸してゐる金額を喋りだした。債権者は案外多數だつた。健助の失敗を知ると早速取りつけに行つた者もあつたが、埒があかなかつた。麥飯や、粥ばかり食つて溜めた金を貸してあつた老夫婦もあつた。また、鯛網と鰯網の貸銀を毎年そのまゝ鹿太郎に預けて複利で計算すると五十圓からになる筈なのに、證券一枚も取つてゐない若い漁夫もあつた。鰯を茹でに行つて儲けた二三元を月々積んで五十圓預けてあつた、今年二十一になる女の獨身者もあつた。「うちにや己の死に金を二百圓爺さんが残しといってくれたのに、大方それも、元ぐち取られてしまふんぢやらうぞ……」子無しの寡婦は人の顔を見るたびに泣き出した。「お前等己を助けると思ふて、鹿太さんに何ぞ云ふてみておくれ。」

「金は利子がえい所へ貸したら怪我がある。——あしこも近頃利子が良うなつたせに危いと思ひよつたんぢや。この前の切りの時に貰ふとかんならんのぢやつた。」こ

んなことを云つて口惜しがる老人もあつた。

さうかと思ふと、

「やれ／＼、家にやこの春茅屋根を瓦に葺き換へるのに錢が要つて貸したゞけ貰ふてうまいことやつた。」とある百姓は喜んでゐた。

鹿太郎の家には暗い影が襲ひかゝつて來た。彼は一日ふさぎ込んで、ろくに飯を食はなかつた。そして、家族に對してごつごつ云つた。——子供の負債は親に掛つて來ないとか、田畑は名前を書き換へて置けば差押へられる心配ないとか、隣村の代書人とひそ／＼話しあつてゐた。佐吉がまご／＼してゐて、他人から訊ねられると秘密も何もかまはずに喋つてしまふと云つて、彼は佐吉を怒りつけ、戸外に出さなかつた。

「それ見なされ、お前は四千圓も貸して兄ぢやせに心配ない云よつたけんど……もう戻して呉れやせんぞよ。」政江は産後の疲れで寢床に就いてゐながら、佐吉にがみがみ云つた。「四千圓も有つたら結構に二人食ふて行けるのに、一文なしでこれから



どないしてやつて行くんどの？」

「えい。その代り畑を四五反俺の名前に書き換へて呉れる云よつた。」佐吉は兄の失敗を苦にしてゐなかつた。

「ほんまにかいの？」

「を。」

政江はくさくしてゐた。赤ん坊は彼女の傍ですやく寝てゐた。彼女には、今大切な用事が澤山有るやうな氣がしていらした。が起きやうとすると身體が重くて立てなかつた。

佐吉は、屋内にゐると落ち着かぬらしく、椽側に出ては空を眺めた。

「こりや、また日和が悪くなつて来るぞ……雨ぢやらうことい。」彼は一人でこんなことを云つてゐた。

「阿呆……何云ひよるんどの？」政江は大きな聲を出した。

「またこりや雨にならうことい。」佐吉は妻の方に振り向いて云つた。

「そんなことを云ふとる時ぢやあるまいがいの。」政江は腹立たしさうに云つた。「畑を呉れる云ふたつて、もつと念を押しとかにや心細うてどうならん。……ちやんと登記をして、證文をここへ持つておいで……私が見にやア安心が出来ん。」

「登記はお父うがしとく云よつたい。」さう云ひながら佐吉は主家の方へ出て行つた。

健助からは皆目便りがなかつた。そして大阪から郵便が来たかと思ふと、健助の債権者が鹿太郎に宛て、發した債務の督促状だつた。靜香の親達の方へも頼りはなかつた。頭のマン丸い、耳が立ち上つてゐる靜香の父親は、二人から頼りがあるかよく訊ねに來た。彼は債務のことは一向知らないもよのやうに、

「佐吉つあんにや、ちつと錢か畑でも分けてやるかよ。」と不快さうに唇を曲げて、こんなことを云つて目をしばたいた。

そしてやがて門を出ると獨りで「健の阿呆めが！ 健の阿呆めが！……靜香をあらんな奴にやるんぢやなかつた。」とぶつ／＼呟いた。



月日が経つた。鹿太郎は今では小舟で釣に行つたり、海鼠や貝を漕いだりしてゐる。彼は、家屋敷も畑も網株も失つてしまつた。しかし負債は皆々完全に返却することが出来なかつた。いつまでも村の人達は彼に損をかけられたのを忘れなかつた。「他人を泣かしても、錢を引つこめて出さん人間がえらいんぢや……くそいまいましい！」彼等は鹿太郎一家の者が通つたあとで憎々しさうに云つた。

佐吉が賞ふ筈だつた畑も競賣に附せられた。けれども村の人々の觀察によると、鹿太郎はなほ現金を内密で持つてゐるといふ話だつた。

佐吉は狭い茅葺きの家を借りて父母と一緒に住んでゐた。鹿太郎は急に年が寄つて元氣がなくなつた。

114 「海鼠網の古いんが有つたら貸して呉れんかいや。」佐吉は良次の家へ行つてこんなことを云つた。「昔や、家のお父うがわいらの世話したんぢや云ふせに……」

「憎らしい。——世話どころか、自分の羽振りが利く時分にや散々他人をえらいめにあはしといて！」母親のこみつは、佐吉が歸つたあとで昔のことを思ひ出して良次に云つた。

「まあ、えいわいの……あんな古い網を貸したつてかまひやせん。」と良次は母をなだめた。

沖へ小舟を乗り出して行くと、良次はよく鹿太郎達と一緒になつた。

「取れるかよ。」と良次が聲をかけると、

「を、ほつ／＼ぢや。」と鹿太郎は佐吉を相手に網を引き上げてゐた。

佐吉は網を引いても、櫓を押してもあまり役に立たなかつた。しかし、鹿太郎は魯鈍な息子に腹立てもしなかつた。彼は昔日のやうな捷やさがなくなつてゐた。

夕方、島へ歸りかけると、親子は健助の噂をした。

「炭坑といふとなかなか働くのも樂ぢやあるまい。」鹿太郎は息子の身の上を案じてゐた。



「九州といふたら、それでもちつとは温からう。」佐吉は空を見ながら云つた。

「何ど病氣にでもならにやえいんぢや。……早よもうこつちへ戻つて來るとえいんぢやがなあ。」

「またこりや日和が變つたらしいぞ。雨かも知れんて……」と佐吉はのろ／＼櫓を押しした。

波止場では政江が子供を負つて、彼等の歸りを待つてゐた。彼女は佐吉が舟から上つて來るのを待つて、其の日の漁獲高を訊ねた。

「一圓七十錢。」と彼女は夫の言葉を繰り返へして、「漁やかいなんほしたつて、えらだけで儲けにやなりやせん。……あゝ、稼ぐといふことはえらいもんぢや！」

政江は、丁度佐吉がするやうに空を見て嘆息した。

(一九二五十一月)

## 脚を折られた男



かつて、本所の××病院で助手をしてゐた頃、私は、機械に喰はれて、手を失つたり、足を切落した男を五六人目撃したことがある。切斷された彼等の四肢は、丁度播古木のやうにさきが丸くなり、縫ひ合された皮膚には絲のあとが紅く残つてゐる。

持つて生れた、物を持ち上げ、或は身體を運ぶ、實に巧妙に仕組まれた、そして美しい手や足はあと方もなくなり、そこには、まるで別物のやうな棒切れがくつ着いてゐる感じが見る者にはされる。

けれども彼等には、最初のうち、自分の手足が、切落されたことが本當のやうに思へないのだ。麻酔薬が消えると、切られたさきはすき／＼疼きだす。が、彼等には、まだ足が、ついてゐるまゝ、疼いてゐるやうにしか感じられないのみならず、痛みがやんでからも、やはり足——或は手は、元のまゝについてゐるやうに感じられる。

一ヶ月あまりたつてからも、彼等は、頭が痒ゆかつたりすると、ひよいと、無い

手を持ち上げてかきに行かうとする。

眠ると、草履をはいて方々を歩きまわつてゐる夢を見る。鼻緒が趾の間にはさまつてゐる感覚をはつきり感じる。眠からさめても、足が布團に觸れてゐるのが感じられるやうだ。

「やつぱり、足はもとの通りについてゐるんかな。」

彼等は、自分で健かな手をやつてたしかめて見る。だが、やはり、切落されたものは落されたのだ。

「おい、今夜は遊びに行かう。」

しかし、彼等は答へる。

「いや、俺れや、一寸用事があるんだがなア。」

さういふ時にのみ、彼等は、播古木のやうな自分の四肢を早くも思ひ出して、それを女の眼前にさらすのを恥しがるのだ。

かういふ不具者を作るのは、しかし工場ばかりではない。私は、くにの村に、庭石



を出してゐて、兩脚ともへし折られ、つひに切斷してしまつた青年があつたのを知つてゐる。

元三郎といふのがその名前だつた。彼は自分でこしらへた松葉杖をついて、義足もつけず、村の道を毎日ひよこく歩いてゐた。

左の方は、膝頭から下を切落され、右の方は、足頸から下を失つてゐた。左の方は、五年も洗濯をしないやうな汚れくさつた着物にかくれて見えなかつたが、右は切られた下へほろ切れを巻きつけ、破れ足袋をかむせてゐた。

子供達は、彼が通つてゐるのを見ると、

「ゲンの足無し。」

「ゲンの足無し！」

口々に大聲に叫んで、なぶつた。

「何ぢや。俺れや三本も脚があるんだ。これを見ろ、三本も脚があるんだ！」  
彼は、松葉杖を振りまわして云ひかへした。

「それが足かい！——そのくさつた着物の下の足を見せい。」  
子供達は、少し彼から距ると石を投げつけた。

彼は、唾や痰をひつかけてそれに酬ひた。彼は、舌を圓く、筒のやうにして、吹きとばした。すると、痰は、勢ひづいて、三間ほど向うへとんで行つた。しかし、それは子供達にまで届かなかつたのは云ふまでもない。

彼は、毎日、食ふものを求めて、村の道を歩いてゐた。

彼の眼についた食へさうなものは、何でも手の届く限り取つて食つた。畠に茄子がなつてゐると彼は、それをちぎつた。瓜も取つた。

柿の下へ行くと、必ず、彼は杖を振り上げて、青くとも澁くともかまはず叩き落した。そして、口の中が澁で引きしまるやうになるのを苦にもせず、わぐり食つた。

村の人々は、元三郎が三本脚でやつて來るのを見ると、

「そら、用心しとれ、また盗人乞食がやつて來たぞ！」

そこらあたりがわれるやうな聲で叫びだした。



彼の行くさきには食ふものとは殆んどなかつた。百姓は、彼が無茶苦茶に畠のものを盗むので、忌み嫌つて、泥溝へ捨てる物でも彼には與へなかつた。すぐ取つて食へる物を作つてある畠には、ちやんと、荆棘を持つて來て籬をめぐらしてあつた。

たまたま、彼の行くさきに籠に入れた瓜が置いてあるかと思ふと、それは、わざと小便をひつかけたものであつた。

籠を置いた者はかげにかくれて、彼が來るのを見てゐるのだ。

元三郎は、その瓜もかまはず掴み取つた。そして、取るなり、口に持つて行つた。見てゐた者はおかしさうに笑つた。しかし、元三郎は、胃の腑がどれだけでも満されるのが嬉しくつて、そんなことは知らずに貪り食つた。

彼には、兄もあり、妹もあり、婆さんと呼ばれる母親もあつた。しかし、婆さんからして、彼を厄介者視して、穀潰し、不用ごろ、きよろ作、など罵言をあびせかけた。

「不用ごろめが、ちつと何ぞせい！」婆さんは二本だけ残つてゐる前齒をむき出して、がみがみ云つた。「なんにもせず飯ばつかし食ふたあ似合ふたことかい！」

そして飯櫃は、彼がどんなにしても届かない、天井から下つてゐる吊棚へ上げてしまつた。

婆さんは、家族のうちで、何もしない者があると、その者を眼のかたきにして、意地悪くあたらすにはゐられないたちだつた。彼女は、何にもしない者に飯を食はせるのが惜しくつて、腹が立つのだ。さういふ性質は、兄にも妹にもあつた。

彼がウスベリに尻をつけ、播古木を投出して座つてゐると、妹が、うしろからそつと近づいて來て、急に、拳を後頭部へ突きつけたりした。

彼はびつくりした。

「こらッ！ 何をするんだ！」

妹は、彼の唾がとんで來るのを見こして、さつと横へとびのいた。そして、おかしさうにげら／＼笑つた。



「ほいたつて、われ、クチャネぢやないかい。」  
「クチャネつて何だい？」

「われ、食ふちや寝てばつかし居るせに、クチャネぢやが。」  
「誰れがそんなことを云よつた？」

「ひい、ひひひ……ひ。」

妹は、人を輕蔑するやうな顔のしかめ方をした。

彼女は、部屋の隅から踏臺を持つて來た。そしてその上へ、あがつて、身體が細くなる程せい伸びをして吊棚へ手をやつた。

「俺にも芋を一ツ取つてくれ。」

妹は、籠の中から芋を取つて、懷に入れながら、片方の手で赤ンベエをした。

「こら、俺にもくれんか。」

「べエエエ。」

「こらッ！ くれといふのに！」

「べエエエ。」彼女は豚が唸るやうに唸つた。

「おのれ、くそッ！」

彼は腹立ちまぎれに、妹を殴りつけやうとして、思はずとび上つた。しかし、すぐ、ウスベリの上へ倒れてしまった。立つべき脚がないのだ！

ある時、婆さんが畠から歸つて見ると、元三郎は、松葉杖で吊棚のお櫃を突き落してゐた。お櫃はウスベリの上に落ちて、輪がはぢけて麥飯は、そこら中でほこりまぶれになつてゐた。彼は、それを手に掴んで、うまさうに、わぐり食つてゐた。

「おどれ、くそたれめが、何をしくさつたんぞ、不用ごろめ！」

婆さんは、畠へ行くのにも、そこらを歩くのにも、常に竹の杖をついてゐた。それが怒つた時には鞭になつた。今も彼女は杖を持つたまゝ座敷へとび上つて、それを振り上げた。

元三郎が、手と一本の脛で這つて四五尺も逃げないうちに、竹の杖が彼の背へとんできた。



「おどれ、何をしくさつたんぢや！——一文も儲るでなし、おどれのために醫者にやどんだけ錢を取られたと思ふとるんぢや穀潰しめ！」

杖はつづけさまに、彼の背から頭へ打ち下された。

「きよろ作めが、きよろくして脚を折りくさつて！……よその子を見い、われより若いのに、ちやんと石出しをして日に六十錢も儲けよるが！」  
婆さんは怒つて惡たいを吐きつゞけた。

村の山には、苔の生えた大きな石が到る處にころがつてゐた。樹を植えるのにも、落葉を拾ふのにも、邪魔になるばかりで、何等、役に立たない石だつた。それを近ごろ大阪から××組が來て、庭石に賣れるといふので、積出してゐた。

山の持主からは、一個、三十錢か四十錢で買取つた。そして百姓を傭つて山から出させ、船に積んだ。向うへ行くと恰好のいゝやつは千圓近くに賣れるのだ。なるべく山にあつたまゝの原形を壊さないやうにしなければならぬ。一寸瓢箪形に突出した部分があると、それが最も大切なのだ。千圓の値打はそこにあるのだ。途中

で他の石にぶつつけたり、崖に觸れたりしてはならない。番頭は、その瓢箪形の部分を傷つけないがために、百姓をこき使ひ、ぶん殴ることさへしかねなかつた。

百姓は、自分達の畠をかまはず、作物の頭からぐしやく踏つけ、邪魔になる岸崖はそれを壊した。

石は傷つけられなかつたが、彼等は時々手を挫いたり足をへしやがれたりした。

それでも彼等には役に立たない石が賣れ、日傭賃を稼げるのが有難かつた。

一ツの石に十人ぐらゐかゝつて、やうく山から海岸まで引ずり出すと、今度は、舟に積む。それがまた一と仕事だつた。でこほこのある大きな石は、下敷の板を折つて、砂の中へすりこんだ。百姓は轆轤で巻いたり、挺子でこねたりして××組が引いて來た古ぼたの棧橋へ辛うじて石を引きずり上げた。そして、それから、舟に移すのだ。

洋服に巻脚絆を巻いてゐる番頭は、ステツキを握つて、汗をたらして働いてゐる百姓にやかましく指圖をしたり、叱りつけたり、かゞんでゐる者の尻をステツキで



こづいたりした。

棧橋は、石をのせるとゆらくゆらめいた。番頭は、折角ここまで運んで来た石を海の中へころばしこまないやうに百姓の動作を一々見つばつてゐた。何か一ツ誤ると、石は忽ち海の中へとびこんでしまふのだ。

百姓には、棧橋の上での仕事が一番困難だつた。

海の上には常に波があつた。棧橋は脚が弱くて積載力がなかつた。で、彼等が挺子でこねるにしても、皆なが一方へよつてしまふ譯には行かなかつた。

元三郎は、そこで脚を折つたのだ。

彼は、片脚を舷側に向け、片脚を棧橋の端にかけて、短い挺子で石をこねてゐた。彼の向ひ側、それか棧橋の上、舟の中に、それぞれ人々が挺子を持つて、掛聲に應じて、いつせいにこねてゐた。

「ヨイトデー！」

「ヨイトデー！」

棧橋よりも舷側の方が少し高かつた。石は波がよせて来る毎にぐれぐれした。そのため重みが、一本の挺子の上のみかゝつて来るがあつた。すると、二本の手は引きのばされるやうになつて持ち切れなかつた。

「これや用心してゐないと不意にころんで来るかもしれないぞ。」彼はさう思つてゐた。

「ヨイトデー！」

「ヨイトデー！」

人々は聲をはけまして力を入れた。掛聲ごとに、石は五分位おづゝ舷側の方へ上つて行つた。

番頭は、うしろの方から絶えずやかましく叱つてゐた。

ふと、元三郎は、足もとがぐれぐれしたやうに思つた。「波が来たな。」彼はさう思つて手に力を入れた。しかし、手にかゝつて来る重量は強くつて指がちぎれさうになつた。



「あぶない！」

誰れかど叫んだ。その時、彼は、もう、うしろへ仰向にのめつてゐた。石がごとんと彼の足の上へころんで來た。

「きよろ／＼しよるせにぢや。」

彼の顔の上へ唾をとばしながら、番頭が云つた。元三郎は、それを誰れかほかの者に云つてゐるものゝやうに、ほんやり聞いてゐた。……

兄と婆さんとは、醫者の費用が、元三郎が石出しをして儲けた金の五倍もかゝつたので、ひどく腹立てた。

「きよろ作めが、きよろ／＼して怪我をしくさつて、この錢をわれ出せい！」兄は、醫者のツケを、播古木を投出して坐つてゐる元三郎の前へ放りつけて、「畠を一段賣らにや、こんな錢は作れやせんが、——おどれがまどえ！　こんなことをして先祖にすむと思ふか！」

兄も母も、彼に食物を與へなかつた。

元三郎は、自分でこしらへた松葉杖をついて、村の丘を登つた。それから谷間へ下つた。又丘を登つた。

丘の下には舟がつけてあつた。庭石を積む舟だ。村の山にある石は悉く積出してしまつて、次第に隣村の山へ侵入してゐるのだ。丘のすぐ上の山の中で石を出す連中が何か喋つてゐた。

「おや、三本脚が行きよるぞ！」

誰かの聲がした。

石ころの多い歩きにくい道を彼は、隣村の方へひよこ／＼歩いて行つた。隣村から今度はK町へ出た。

町の通りで彼は、土の上へちかに自分の播古木を投出して坐つた。通る人々にそれを見せた。人が珍しがつて斷ち切られた脚のさきへ集つて來ると、彼は、泣出しさうな表情をして頭を下けた。

一錢か二錢、投げてくれる者があつた。



「右の方も見せてみな。」  
 「へい。」  
 「何だ。ほろきれに足袋をはかしてゐるんか。」  
 「へい。こつちも折られたんでござえす。」  
 道通る人は、兩足のない男を珍しがつて見た。彼は、見世ものゝやうに澤山の人々に取まかれて、哀しさうに頭を下げ、泣き出しさうな表情をして施しを乞ふた。しかし、それもほんの僅かの間だつた。町の者はすぐ彼にあきてしまつた。昨日まで、脚無しをからかつて面白がつてゐた若者も、元三郎に振り向きもしなくなつた。

でも彼は、根氣強く町を歩いた。  
 彼は店舗の前へ立止ると、いつまでも三本脚で突立つたまゝ、そこから離れなかつた。

垢と埃とに汚れた彼が店さきに立つてゐると、店の中までが汚くなるやうに町の

者は感じた。

「シツ！ 行けい！」

彼等は下唇を突き出して、手でそこから追ひ拂ふやうにした。

だが、元三郎は、いつまでもしぶとく、立ちつくしてゐた。彼は裾を端折つて、脛から下がない脚を店の者に見せた。そして、それを上にあげたり下したりした。

しまひには、店の者が根氣負けをしてしまつた。

「チエツ！ いま／＼しい。一錢か二錢くれてやれい！」

けれども、根氣で相手を負かせる手もさう長くはつゞかなかつた。

秋の小粒な雨がしよほ／＼降つてゐる物悲しい日だつた。彼は終日、町をさまよひ歩いた。半きれのパンも口にしなかつた。

「また脚無し乞食がやつて來やがつたぞ！」

町の者は敵愾心のある眼で彼を睨みつけた。

彼が店の前に立止るとつゞかい棒を持った店員が、毆つけに來た。



道は雨にぬれ、雨水は、草履とほろ切れとにしみ通つて、断ち落された脚さきにまでやつて來た。彼は夕方までさまよひ歩いて、すつかり骨無しになつたやうに疲れてしまつた。

彼は何か食ひたかつた。腹の中が空になつて胃腑が痛かつた、——麥飯でいゝ。焚きたての湯氣の立つてゐるやつがほしい！

日が暮れて、あたりがすつかり暗くなつてからも、やはり彼は町をさまよつた。けれども、何も食ふものは得られなかつた。

その晩、町はづれの、材木小屋へ這ひこんで、彼はそこで一夜を明かした。

饑餓は一層つものつて來た。でも彼は、何んとかなるやうな氣がしてゐた。も少したてば、誰れかが食ふものを呉れるだらう。人間が餓死するなんて有りうるものではない。彼は朝が來るのを待つた。あしたになればどうにかなるだらう。……

雨は、翌朝やんで、材木小屋の用材を立並べた間から、さはやかな朝日がさして來た、でも、彼には昨日も今日も同じことだつた。三本の脚がふるへて例れさうだ

つた。彼はぐつたり頭を胸の上に垂れて、左右の杖を運んだ。そして、途中で杖を放り出して、休み／＼丘に登り谷へ下つた。

彼は眼まいがして、頭が、ぐわん／＼鳴つた。畠の崖に長いこと腰をかけて休んだ。

「ヨイトデ、ヨイトデ！」

山の中で石出しの掛聲がしてゐた。

何か食ふものはないか、彼は、ほんやり考へてゐた。

と、彼は、杖を取つて、丘の細道を山の方へひよこ／＼登りだした。

山にかゝつたところに、庭石出しが、綱や、挺子や、轆轤を置いてあつた。その傍に、風呂敷に包んだ辨當行季が十個あまりころがつてゐた。彼は、辨當の方へしのびよつた。

一方の杖を放して膝をつくつと、一番端にある白い風呂敷に包んだやつを、彼は手早く、懷中へ押しこんだ。そしてそれから丘を下つた。しかし、一町も行かないう



ちに、彼は、うしろから坂道を三四間さきへ突きとばされた。彼は、杖を離し、懐から辨當を落して、粟を薙取つたあとの畠の上で三四回轉んだ。

「くそ泥棒！」

番頭と、二三の若者が追つかけて來てゐたのだ。

「俺の辨當を盗みやがつて、——かうしてくれる！」

番頭は、固い靴で彼を蹴上げに來た。二三人の若者は、番頭に忠義立てをしようがために、それぞれ拳をかためてぶん殴つた。

彼は殴り殺されさうな氣がした。そして頸を締め、手脚をすくめて、丸くなつてゐた。四人の者は足りるだけ彼を殴ると、今度は、一人が一本づゝ手と足のない脚とを掴んで、樫の樹が立つてゐるところへ引つさげて行つた。そこで、彼を地上か三尺ほど高く、樫の幹へ縛りつけた。

夕方まで、彼は、そこに縛りつけられてゐた。恐怖に慄へて、何も口をきくことが出來なかつた。そして、暫らくは空腹をさえも忘れてゐた。しかし、やがて、身

體の衰弱と饑とがひしひしと迫つて來た。彼が動くとき身體が樹からすり下つて、繩は、喰ひこむやうに、四肢や胴體をしめつけた。

薄暗くなりかけてから、兄が、話を聞いてやつて來た。

「何をしくさつたぞ、穀潰しめが！」

兄は腹立てゝ、肘で彼をこづくやうにしながら、繩を解いた。

縛を解かれて、木から下り落ちた彼は、なほ暫らくぶるゝ慄てゐた。彼は、もう半分、死んでゐるやうだつた。身體中が鈍い刃物で切られたやうに痛かつた。

「阿呆めが、何をしくさつたぞ！」兄は云つた。「立てれい、……さつさと家へ去ぬんだ！」

彼は、有りつたけの力を搾つて松葉杖にすがりついた。そして、ひよろゝゝころげさうになりながら、丘を下つた。

「もつとしやんゝ歩けい！ 兄はあとから追ひ立てた。「穀潰しの不用ごろめが！これから、もうよそへ出て行くことならんぞ！……おどれは何といふことをしくさ



つだんぞい！」

家へ歸ると、彼は物置きの上蔵の中へ閉めこまれた。兄は外から、がちやつと錠をおろした。

「もうこれから、一步もよそへ出て行くことはならんぞ！」

兄は、胸中に鬱憤がたまつて、思ふさま、誰れかにこひどくあたらずにはゐられない氣持がしてゐた。

「くそつたれめが、たゞき殺しても足れやせん！ くそつたれめが！」

兄は、よつびて繰返へしてゐた。

あくる日、彼は、弟のことを思ひ出してゐた。しかし、もつと弟をひどいめにあはしてこらしめてやらなければ、腹の蟲がおさまらなかつた。彼は、元三郎を閉めこんだまゝ、島へ行つて、麥蒔きの用意に空地をおこした。彼は牛を使つた。婆さんと妹とは、牛銚の届かないところをかじいた。晩にはくたびれてすぐ寝てしまつた。土蔵の中には音も聲もしなかつた。また音がしても、厚い壁と戸に遮られて外には

もれてきなかつた。それで、彼等は、却つて安らかに眠入つた。

その翌朝、兄は、練粕を出すために、土蔵を開けた。錠を外ししなに、彼は、ふと、

「元よ！」と呼んでみた。

土蔵の中は練粕の臭ひがして薄暗く、ひつそりしてゐた。

「元よ！——元三郎！」

だが、彼が発見した弟は、氣抜けがした眼をして、ものを云はなくなつた弟だつた。

元三郎は、練粕俵にかぢりついて、中から練粕をほじくり出しては、それは食つてゐた。

「元よ、どうしたんぢや？」

彼は、弟の汚れた着物の襟筋を掴んだ。すると、元三郎は、殺しに來た敵を見るやうな眼で、兄を眺めながら、ぶる／＼慄へだした。……



元三郎は、外へつれ出されて、飯を與へられたが、間もなく死んでしまった。

私は彼のことを思出すごとに、××病院で手や脚を切斷した人達のことを考へないではゐられない。

今、彼等はどうしてゐることか！

(一九二七、四月)

## 俎板と播古木



今度、池袋へ引つ越した。  
池袋と云つてもはづれの方で、長崎村に近い。裏には、二三軒の長屋が建築中で、大工がごとく釘を打つたり、鉋を使つたりしてゐる。細い通りへ出たところには一つ一錢の焼饅頭を賣つてゐる。

引つ越して來たのは、十二月五日だ。敷金と荷車賃とは、どうにか都合がついた。しかし、いよ／＼新しく家にはひると、もうあますところの金は僅かしかない。これまでTのところにて、道具などは、一緒に使つてさう不自由をしなかつたが、別になると、一々それ等の物を買はなければならぬ。箒だの、杓子だの、箒だの、思ひもかけないこまごました物が澤山要るものだ。

しかし、さういふ諸道具を皆な買つてゐると、肝甚な米が買へないし、米を一斗も買つてゐると、差しあたつて必要な道具が買へない。

まだ十二月五日である。それなのに、來月にならなければ金のはひるあてがない。こんな無鐵砲なやり方をしなければならぬせしめたものであるならば、僕は大きい

に恨むのである。ある安定がなくては、僕は落ちついて本も讀んでゐられないたちである。

とにかく、米を四升買った。

それから炭、セリン、鍋、土釜、庖丁、バケツ、湯沸しなどを買った。殆ど金を使ひはたしてしまつた。それからお菜は、味噌汁と大根ばかりで辛抱して行くのだ。……大根を切るのにマナ板がない。どうせいるんだが……いくらするかしら。

「薄い、一番小さいやつで五十錢する云よつた。」

通りを歩いてきた妻のトミが云つた。

「高いもんだな。」

「裏の大工サンが仕事をしよる處に板切れでもないかしら。」

「有るだらう。……さうだ、そいつを貰ふてくりやえい。」

あくる朝、トミは僕が眠つてゐるうちに起きて、あはよくば適當な板を黙つて失敬してきやうとして、裏の建ちかけの長屋のまわりへ行つた。朝の早い、一人の老



いた大工はもう来て焚き火をしてゐる。鉋屑と一緒に、マナ板になりさうな板切れを惜しげもなく火の中へ放りこんでゐる。

「大工さん、こんな板切れ一枚貰へませんか。」

「何にするんだな？」

「……そのう……一寸表札に……」

マナ板にするといふのが恥かしくつて、トミはさう云つた。僕は朝飯にパンをかぢり乍らそれをきくと、恥しがるとミを叱りつけ嗤つた。嗤つてゐるところへ、ぢいさんの大工はきれいに鉋をかけた表札にするやうな板を持つてきてくれた。

「これじゃ仕様がな。表札にやちつと大きいし、マナ板にや勿論小さい……」と、ぢいさんが歸つたあとで僕は云つた。「折角削つたりして持つて来てくれたんだから、焼饅頭を十銭買ふて持つて行つてやれい。それで持つて行つた時に、マナ板にするやうな板切れはないか、きいてみれやえい。」

十銭でマナ板が出来れば安いものだ。トミは銅貨ばかりを拾ひ集めて、焼饅頭を

焼いてゐる細い通りへ出かけて行つた。

「こしらへてやる云ふたかい？」トミが歸るときいた。

「焼饅頭を持つて行つてやつたら、ほかの大工さんが何だと思ふて、こちらへ向いたから、もう話しせずに戻つてきた。」

「そんじや、仕様がな。じやないか。」

「だつて、板があまつとつたつて、それがあのぢいさんのものぢやないのに、他人の前で、こしらへてくれやかい云へるもんか！」

「よし、それじや、俺が晩に行つてかつばらつて来てやる。」

夕方、僕は長屋のまわりをぶらつき、板のあるところを見ておいて、晩にやつて行つた。勝手の板の間に敷くために削つてあるのを一枚引きぬいてきた。

「こりやいかんわ。」僕が持つて歸つた板を見て、トミは眞面目に云つた。

「どうして？」

「これは、晝あのぢいさんが削りよつた板ぢやないん？これや向うに要るのに、こ



んなんを持つて来たら、向うに困るわ。」トミが焼饅頭を持つて行つた時、ぢいさんは勝手の板を削つてゐたのである。折角、自分達に好意を持つて、板を削つてくれたりしたぢいさんが仕事をした箇所、板を取つて来るのは、氣がすまない」とトミがいふのだ。

「ぢや戻しとかう。」

「戻しとかにやいかんわ、マナ板は、丁度えい要らん板が見つかるまで釜の蓋でも使ひよるわ。」

僕は腺病質で、虚弱である。一ヶ月も大根のお菜で、一日二食、それも食ふや食はずでは、身體を毀してしまふ。何か安くて滋養になる物はないかな。少し残つてゐた肝油ものんでしまつた。この頃は通りを歩いて居ると、男の癖に魚屋や八百屋の店頭に並んでゐる物に眼を引かれる。何か安くて滋養になるものはないかな。トロ芋がある。これは滋養になるときいて居る。そしてまた割合高いものだときいてゐる。が見ると、大きな一と塊に十錢の札が立ててある。よし、うまい。トミに買

つて來させやう。

ところが、トロ芋は、山葵おろしでおろして、播鉢で播らねばならないとトミがいふ。仕様がないなあ。だが、まあいゝ。買へ。山葵おろし十錢、播鉢二十錢——これは四十錢出すといゝのがあるが、二十錢の粗悪なやつでも十分使へる。ヌク飯にトロ芋をかけて食ふとなかくうまい。七八年前、八百屋の二階を間借して居た時、食つた味を思ひ出した。さあ、これでうまいやつが食へるぞ。

「まだ、もう一つ播古木がなけりや！」とトミがいふ。

「いくらするんだ？」

「さあ……見てくるわ。」

歸つて來たトミは、

「十七錢……反物の芯に入つとる桐の棒のゆがんだやうなんが十七錢もするから買はなんだ。」

「ぢや、俺がそこらで檜でも盗んできてこしらへてやる。」



そこで僕は、古いナイフを持つて、田畝道をぬけ、長崎村に近い高臺の澤山檜を植えてあるあたりへやつて行つた。畑を堀り下げて廣い道がついて居る。それを右に曲つて左に入ると、丁度播古木にいゝやうな檜がある。つひその茅葺きの前では子供が遊んでゐる。が、氣づかれることはあるまい。人が大分たびたび通るらしい、笹や芝生が踏みつけられて自然に細道のやうになつてゐるところからはひつて行つた。どうもあたりの様子からして、ここは道を通る人が便所へ行きたくなると、一寸はひつてきてやるところらしい。氣をつけて踏まぬやうにしなければいかん。と思つて歩く途端に、きたない話だが踏んでしまつた。右の下駄から足袋にまでついた。そのまま歩くと足袋について居るのが下駄の表にぬりつきそうだ。足袋を片方だけぬいだ。なに、歸つて洗へば、またはける。これだつてかけかへのない足袋だ。さて、それから、播古木に丁度いゝ檜を選んで、ナイフで切りめを入れたのはよいが、ナイフが古いので、手ばかり痛くて、一向切れない。そのうちに、誰れかやつて來やしないかあたりを見まわすと、今まで氣づかなかつたが檜と松林の間か

ら、すぐ向うに、新しい亞鉛葺きの家がある。その家がまた一段高いところにあつて、家の前からこちらがよく見える。そこに厚司を着た男が鋏を持って立つて、ちつと僕の方を見てゐるのだ。十分四方に氣を配つてかゝつた筈だのにあれに氣がつかなかつたのか！ 厚司の男は、最前から僕のやつてゐることを見てゐるらしい。追つばらつたり、掴まえに來たりする程でもないから黙つて見てゐるのだらう。しかし、人が見てゐる前で、たとへ一本の木でも盜めるものではない。僕は木をそのままにしてそこから逃げてしまつた。

その翌日の夕方である。

「今晚は。こなひだは有りがたうごわした。」と思ひかけなく、老いた大工が勝手から顔を出した。「家にや子供が四人もあるもんだから、焼き饅頭は喜んでよばれましたよ。」

「……………」

「これ。」と彼は、一寸ためらふやうにして、半纏の下から削つた厚い板を出してき



た。「マナ板にでも役立つなら使ふておくんなせえ。」

「……何ですか！」芋を食つてゐた僕はびつくりしたのである。

あとでトミが、

「こちらにマナ板がないんを知つとつたんぢやらうか。」と云つた。

「さあ……………」

「これで助かつた。」

「お前がこしらへてくれと云つたんぢやないんか？」

「いゝえ。……でもこれで助かつた。」

僕はトミが喜ぶと却つて何故か不快さがつので、氣むづかしくなつてしまつた。

「ふむ。また播古木もこしらへてくれるだらう。」

つひにこんな皮肉まで云ひ出した。

が、ぢいさんも播古木はこしらへてくれさうにない。山葵おろしではトロ芋の代りに大根おろしをこしらへてゐる。

一、九〇五年五月二

本をたづねて



私はつゞけさまに咳をして、紙を口元にあてると血が出た。傍でFが頻りにパツトを燻らしてゐる。その煙が私の咽喉へ這入つて来て、そのたびにむせかへるやうになつて、咳をした。

血が出ても別に驚くことはない。私は、何げない顔をして、紙を疊んでふところに入れた。

私の肺は五年も前から腐りかけてゐる。腐ればいづれ血管が破れて血が出るのだ。數學のやうに明瞭である。血が出たからすぐ死ぬとはきまつてゐない。驚くことはしない。だが、恐れて用心しなければならぬ。

## 二

最近、佛蘭西へ行くことになつてゐるB氏の書齋で若い人が五、六人話してゐる時

また私はつゞけさまに咳をして、血を啗いた。

日が暮れて、東に傾斜した屋敷は、濕つほく、冷かさが足元へしのびよつて来る時分だつた。その前、三時すぎに、出發前の記念の寫眞をとつて、それから、祝杯といふのか、何といふのか、ともかく苦い酒を飲んで、掌を五ツ六ツたゞいたりした。その酒が胸にいけなかつたのだ。

若い人達は、——私も決して年が行つてゐる譯ではない。私もその若い人達の一入なんだ。——B氏が出發前に置土産として出した、大きな本の批評をすること、ある二三の雑誌、新聞で批評をすることを話してゐた。

「Aさんあたりがお書きになるといふんですがね。」五分刈りに刈つた頭髪をそのまま一ヶ月ばかり手入れをせずには伸ばしてゐるS君が、長髪のB氏にこんなことを云つたりした。

「僕、××に書きます。」部屋の隅で、大きな籐椅子にもたれてゐた、吃りで、スリちびた下駄をはひて郊外から三里も五里も歩いてよく市内までやつて来るC君が



云つた。

B氏は、C君が批評を書いて呉れようとはあてにしてゐないらしかつた。彼は、寸時、ためらふやうにしてゐたが、

「え、やつて下さい。」と云つた。なんでも、今度出した「脱走」は、B氏がこれまで書いた十冊に近い本の中で、一番自信が持てるものらしかつた。

「一冊、本をあげるから、読んでくれ給へ。」私は、二三度、かう云はれてゐた。

その尨大な假綴の本は、新らしく頁を切つて、机の上にあつた。誰れ彼れが、それを手に取つて、拾ひ読みをして、次の者の手に渡したりしてゐた。

六百頁からの本である。読み上げるのになか／＼かゝりさうだ。私もそれをちよ／＼のぞいて見た。B氏のいつもの例で、やはり自分の關係した周囲のことを書いてあるらしかつた。

五六行、或は一頁くらゐづゝ見たところ、なか／＼描寫も文章も練れてゐて、深味があるらしい。一年間に六七人の、近かしい人々が死んで行つた、そのことが中

心となつて書かれてゐるやうだ。その死によつてB氏の考へ方も變つたとか。——それがどういふ風に變つてゐるか、興味はそこにつながつてゐる。

「栗本君、——「戦士」に書いて呉れないかな？」

茶の間で雑誌「戦士」の編輯者と何か話してゐたB氏が書齋へ這入つて来て、さう云つた。

「え、なんなら書いてみます。」私などが書いたところで、元來無力ではあるし、いゝ批評眼を持つてゐる譯ではなし、さう役に立ちやしないんだ。口頭で感想をらゐるは述べしるとしても、私は批評を書くつもりは持つてゐない。従つて、ここで私の返事は張り合ひがなかつた。それがこの場で、自分に一寸物足りなかつた。

「書きます。ぜひ書いて見ます。」そこで、私は、かう云ひ直した。

「悪る口でも抗議でも、なんでもいゝから……」

「え、思つた通りを書きます。」

私はまた咳が出て來た。硝子窓を閉切つた部屋には、煙草の煙が立ちこめてゐる。



「いくらやつつけられたつて、H、Bの存在は頑として動かないからね。」B氏は皆なにこんなことを云つて笑つた。

咳がつけざまに出て來た。痰を紙に取つて見ると血だ。

私は、僅かのもを封筒に入れて饒別につけて來てゐたが、そいつを懐から出さず、そゝくさとそこを辭した。

### 三

晩に靜かに寢て、翌日午前中動かないやうにしてゐると、血は止まつた。それでも一日寢てゐた。寢て本を讀んだ。

饒別は新らしい封筒に入れかへて、そこへ「寸志」とだけ書いてトミに持たしてやつた。停車場から家までの道すぢを、くはしく地圖に書いて帶の間にはさました。

「向うへ行て、どう云ふたらえいん？」彼女は出かけに、私にきいた。

「どういふたつて、お前がいゝやうに云ふとけ。」

「私、栗本の妻です、つて云はなげや向うに分らんでせう。」

「そんなこと云はんとて知つとるよ。一度こちらへ來たことがあるんだもの。」

「いゝえ、忘れとるかも知れんわ。」

「分らなげや、分らなくても置いといて戻れ。こちらの氣持さへすめばいゝんだから。」

トミは新らしい下駄を出してはいた。

彼女は行きかけて、また戻つて來て「若し、こちらが貧乏だから向うに取つて呉れなかつたらどうしよう？」ときいた。

「取つて呉れなくつても放つといて逃げて戻れ。」私は、蒲團の中からさう云つた。B氏は、もうあと一日で出發する筈だつた。

### 四

「本を呉れてよ。」



「どれ？」電燈がついて、だいぶ腹がへつてゐた。私は上身を起して、歸つて來たトミを見た。トミは少し蒼ざめて笑顔を見せてゐる。

「これ本。」

「どれ？」私は寢床から手を伸ばして、新聞紙に包んでゴムの紐をかけたづつしり重みのあるものを受け取つた。本にしては何故かビヤ／＼してゐる。トミは、片手に葱をひと握り持つて笑つてゐる。

「おい、これや本でないが……肉ぢやないか。」

「いゝえ、本よ。」その聲が笑つてゐる。

「いや異ふ。」ゴムの紐をはづして新聞紙を開けて見るとやはり竹の皮に包んだ肉だ。

「一體、本を呉れたんか呉れなかつたんか！冗談を云つちや分らないよ！」私はいつのまにか激してゐた。それは、たぶん病氣のせゐらしい。

本は呉れたのである。トミは歸りに電車の中でそれを擴げて讀んでゐた。彼女は讀んでゐるうちに痰が咯きなくなつて、本を持つたまゝ窓の方に向いた。ところが、咯くとたんに、重い、ぶ厚い本が彼女の手から窓の外へすべり落ちてしまつた。

目白驛で降りて線路の土堤をあとへ引つかへして見た。彼女は、下駄の齒を割り鼻緒は伸びて切れさうになつた。だが本らしいものは見つからないといふ話だ。もう薄暗くなつてゐた時分のことだ。

「ほんやりしてよく見ないからだ！」

「向うへ行つてまた引つかへして來たけれど無かつた。」

「土堤の下に溝があるだらう、——あの溝はよく見たか？」私は腹立てゝがみ／＼云つた。

「……………」

「本を窓のふちまで持ち上げて痰を咯くやつがあるもんか！なんでもウツかりしてゐるからだ！俺がもう一度よく見て來てやる。」



私は、この頃、ひどく短氣になつてゐる。腹立ちまぎれに、トミをぶん殴りたくて仕方がなかつた。やつと我慢してこらへたくらゐだ。

袷に着換へ、夕飯をすゝめるのを振り棄て、私は家を出た。電車賃に弟の財布とトミの財布とを空にして持つて來た。

目白驛から高田馬場まで線路は高くもり上げられ、人家や人道を見下ろして電車が迂つて行く。左右は芝生の傾斜になつてゐる。私は下駄で溝へころげ落ちさうになりながら、時々、四ツ這ひになつて、そこを往き來した。闇の中に、處々捨てられた、紙片や丸めた新聞紙が眼に映る。早速そこへ行つて本ではないか確かめた。

電車は黄色い燈と、青い燈をともし、唸り聲を立てつゝ風を切つて私の頭の上を通る。私は、線路自殺をはかつてゐる者のやうにその下をうろくしてゐるのだ。

どうしても本は見つからない。なにしろ、腹はぺこ／＼になるし、咳をして痰が出る。痰に血がまじる。私はがっかりして、驛まで引つかへして電車に乗つた。電

車で新大久保まで來て、それから反對に目白行きに乗りかへ窓から頸を出して本らしいものは落ちてゐないか見て行つた。本が見つかれば窓からとび降りるかもしれない位ゐだ。

どうもないやうだ。

「お前、どつかへ本をかくしとるんぢやないんか？」私は、家へ歸ると雨戸や勝手もとあたりを探しまはつた。どうも、トミが云つたことが冗談のやうに思はれるのだ。いゝ加減な作り話のやうに思はれるのだ。

「本當に呉れたんか？」

「えゝ。」

「嘘だらう？」

でも彼女は、本を包んであつた薄いすき通る紙を出して、それだけはさきに取つて懐に入れてあつて落さなかつたといふ。しかし、私は、まだをかしい氣がした。私が何にでもむきになるのを面白がつて、トミがどつかへかくしてゐるとも思はれ



る。

## 五

翌る日、五時頃に、私はトミを促してもう一度探しに行つてみた。

「あとからそんなに騒いだつて有るもんか！」弟は寝たまゝ冷淡に笑つてゐた。二人は、新大久保まで行つて、又、目白の方へ引つかへして來た。引つかへす時に私は、トミを窓の方へ引つぱつて來て、どのあたりだつたかやかましく訊ねた。

高田馬場へ着く手前のところで、トミは、このあたりだつたといふ。

「なアんだ、このあたりか。——ぢや昨夜はまるで見當違ひなところを探したんだ。」

すぐ改札口を出て、線路の西側を木の柵に添うて二人は白い紙が落ちてゐると立ち止まつて見ながら歩いた。

暫らく行つて、赤字で「脱走」と印刷した表紙を柵の傍からトミが拾ひ上げた。

表紙だけ引きちぎられ、露にぬれてゐた。たしかにB氏のところで見た本の表紙だ。やはりここで落したんだな。私は、あたりを見まはした。だが本らしいものはない。

「落した時、電車の速力で表紙だけちぎれたんだらうか？」

「さあ……これや、誰れかど拾うて引きちぎつたのよ。」

「こんなところでボンヤリ落すからだ。」

もう太陽が出て、制服の學生が道を急いでゐた。荷車が通る。あれだけ、大きな本が人目につかずにはゐまい。

私は、トミに腹立てたり、昨夜あれだけ歩きながら、ここへ來てよく見なかつたことを口惜しがつたりした。昨夜來ればたぶん有つたんだ。

今朝、誰れがど拾つて表紙だけ引きちぎつて、中味はどこかへ持つて行つたのだらう。

私は、咽喉のところが焦げつく位ゐやきくした。やきくしながら、若しやと



のもかまはずに驛の方へすたく／＼引つかへした。

(一九二六、十一月)

思つて、柵を越して、傾斜になつた芝生や、茅のあたりを探しまはつた。無い。それまでは、トミが、どこかにかくしてあるかと、つひ思つてゐたのだが、ちぎれた表紙を見ると、結局ここで落して無くなつてしまつたことが疑ふ餘地がない。「仕様が無い！ 無くなつたんだ！」私は、露と土で手足を汚して、また柵を越して道に出た。

と、向うから、トミが笑ひながら、水にぬれたぶ厚な本を、片手に高く差し上げて見せながら、小走りにやつて來た。

「有つた、有つた！」トミは、私が彼女の方を見ると。なほ足を早くかはして、とんで來た。

「どこに有つた？」

「あの溝に放りこんであつた。」

「さうか、よくあつたもんだな。——まあよかつた！」

私は、すぶぬれになつた「脱走」を持つて道行く人々が、不審けにじろ／＼見る



昭和貳年十月十四日印  
昭和貳年十月十六日發

刷行

文壇新人叢書第八篇

豚群

〔定價金五十錢〕

黑島傳治

東京市日本橋區通四丁目五番地

和田利彦

東京市神田區松下町七番地

佐藤磨

東京市神田區松下町七番地

明治印刷株式會社

著者作印



著者

發行

印刷

印刷所

發行所

東京市日本橋區通四丁目五番地  
電話日本橋一六四一  
(振替口座東京一六一七)

春陽堂

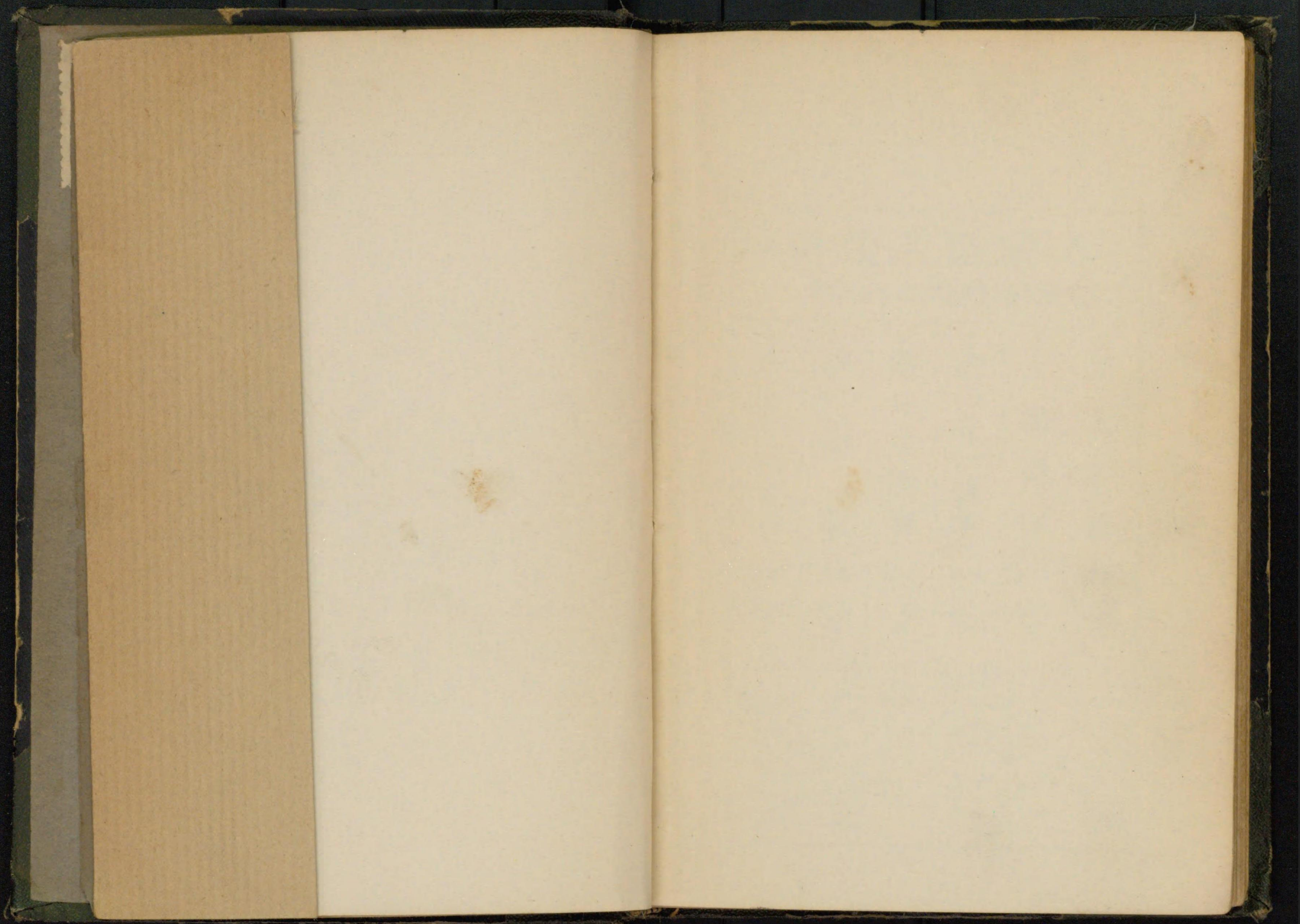


■ 文壇新人叢書 ■

定價各冊五錢送料各四錢

<p>1 正太の馬 坪田護著</p> <p>正太の馬。正太樹をめぐ る。枝にかいた金輪。 コマ。子供の憂鬱。雷雨。 田園小景。三輪車。</p>	<p>2 人間機械 山村義著</p> <p>一九二二年。兵士に て。罵られた子供。共 ペンチ。脚。人間機械。何 が道徳的か。勇しき主婦。</p>	<p>3 繪のない繪本 林房雄著</p> <p>繪のない繪本。新しいそ ぶ物語。林檎。蘭。公園 の婦曳。馬鹿。N監獄署 懲罰日誌。</p>	<p>4 遙なる眺望 小島勲著</p> <p>遙かなる眺望。 地平に現はれるもの。</p>	<p>5 浚渫船 柴山嘉樹著</p> <p>乳色の霧。浚渫船。田舎 者が都會を見る。糶。散 歩。校正係。刺された 男。プロレタリアの乳。</p>	<p>6 小さい田舎者 山田三郎著</p> <p>小さい田舎者。檻。應援 辯士。足袋。歳末。木賃 宿。肉身をめぐつて。甘 酒の釜。</p>
---	--	---	---	--	---







55  
15



550  
156



